

J21-  
93

和漢名画集







原色アト一パイ和漢名畫集目次

狩野探幽筆	孔子像	熊斐筆	蓬島雙鶴圖	住吉具慶筆	兩舍圖
久隅守景筆	美人圖	司馬江漢筆	海上朝嗽圖	岡本豐彥筆	四條夕涼圖
紅蓮白鷺圖	下條正雄君藏	谷文晁筆	加官進祿圖	谷文晁筆	渡邊溫行君藏
子爵末松謙澄君藏		古畫	紅蓮水禽圖	土佐光成筆	賣貨郎圖
安藝秀治君藏		鍛形紹真筆	高橋義雄君藏	宮崎友禪齋筆	東京美術學校藏
岸卓堂筆	唐人圖	鈴木其一筆	七夕美人圖	寺野模嶺筆	僧正遍照圖
岡本秋暉筆	子爵末松謙澄君藏	松野親信筆	星野日子四郎君藏	狩野秀賴筆	子爵末松謙澄君藏
柿本人麿像	藤懸靜也君藏	岡本秋暉筆	水鄉小禽圖	傳山田右衛門作筆	壽老騎鹿圖
呂紀筆	子爵末松謙澄君藏	勵宗萬筆	美人圖	長恨繪卷	清野清太郎君藏
美人奏樂圖	下條正雄君藏	英一蝶筆	雪中南天圖	露殿物語繪卷	笹川臨風君藏
住吉廣通筆	侯爵德川賴倫君藏	山本梅逸筆	須藤傳次郎君藏	板谷桂意筆	三宅長策君藏
宮川長春筆	美入圖	沈南蘋筆	澄海樓詩意圖	香爐峯像	福島啓三郎君藏
林成幹筆	酒井庄吉君藏	土佐光起筆	田中慶太郎君藏	田崎草雲筆	小篠彦平君藏
狩野常信筆	春夜宴桃李園	谷文晁筆	睡貓圖	遊鯉瞰下圖	楠林安三郎君藏
宋紫石筆	子爵末松謙澄君藏	姜隱筆	秋冬草花圖	渡邊華山筆	鷹見久太郎君藏
沈南蘋筆	雨巾鷄圖	西王母圖	永坂石棟君藏	渡邊小華筆	山本安三郎君藏
花鳥圖	藤懸靜也君藏	東京美術學校藏	花鳥圖		
男爵都筑馨六君藏		東京美術學校藏	青木定謙君藏		



西田忠亮書

煎斐華箋品變歸圖

顛  
斐  
韋

養品變歸圖











司馬江漢筆 海上朝暾圖

絹本 竪一尺 横二尺三寸九分

The Morning Sun on the Sea. By Shiba Kokan.  
(1747-1818)

石田・五六郎君藏

司馬江漢名は峻、字は君岳、通稱を安藤吉次郎といひ、年四十餘にして土田氏に入夫す。不言道人西洋道人また春波樓等の別號あり。延享四年に生る。幼より畫を好み狩野の風格を學び、また宋紫石に畫法を問ひ、鈴木春信の門にも入りて春重と號し、師の歿後には二世春信と稱せり。嘗て江漢長崎に遊び、蘭語を研究し、洋畫の法を修む。江戸に歸りて、後専ら油繪銅版畫に従事し、自ら銅版の元祖といへり。

今江漢の畫風を見るに頗る多様にして其の變化の著しきに驚がすんばあらず。或は南宗畫によれるあり、或は狩野風を帶べるあり、或は鈴木春信と區別し難き迄に流麗なる浮世繪派の美人を寫したるものあれど、然も江漢の最大特色は洋畫を中興したるにあり。

抑我國に於ける洋畫の起源は頗る古く、耶蘇教傳來と共に其の法を傳へしものにして、徳川初期には頗る多く行はれしが、島原亂後、異教の嚴禁、鎖國等によりて、其の法一時全く中絶したりしなり。然るに茲に司馬江漢を俟つて、始めて密陀油に繪具を溶きて、西洋油繪に擬し、洋畫の法を復興せるなり。

即ちこの畫風は西洋畫に東洋畫を混し、一新様式を創始せるものにして、本圖の如きはその標本的のものといふべく、彼が特色を發揮せるものなり。當時油繪の將來せられたるもの其の數少なかりしに、よくかくの如き手法を創意したりしは特筆大書すべきなり。而して其の識見稍偏狹なりしと雖、尋常畫家と其の趣を異にし、極端なる寫實主義を主張し、當時の畫界の一角に一波瀾を生ぜしめたり。彼が繪畫に對する思想は春波樓筆記によりて窺ふことを得。

江漢既に畫家として名聲都鄙に聞えしかば、往々諸侯の召に預りしも、敢て其の聘に應せず。悠々山水を樂しみ、四方に漫遊し、名山勝川を探りて畫囊を豐にせり。かくて文政元年十月歿す。享年七十二。















英一蝶筆睡猫圖

絹本 竪四尺六寸 横一尺四寸

Painting of a Cat under the Chrysanthemum. By Itcho Hanabusa.  
(1652—1724)

子爵末松謙澄君藏

英一蝶は多賀氏、名は信香又安雄と稱す。幼名は猪三郎、通稱は助之進、また次右衛門と呼べり。承應元年大阪に生る。父を多賀伯庵と稱し醫を業とす。一蝶幼より繪事を好み、寛文六年江戸に來り、狩野安信の門に入れり。是れ一蝶の根本的修養、狩野派にある所以なり。後土佐家の趣を折衷し、猶岩佐又兵衛、菱川師宣等にならひ、市井の風俗を寫すや、狩野の風格を脱して、嶄新なる取材と、巧妙なる表現の手法とを以てし、よく當時の風尚に投じ、浮世繪師として名聲噴々たりしかば、遂に師安信に破門せられたり。實に彼が本領は市井の風俗を畫くにありしと雖、眞摯なる狩野の修養に成れるものに至りても、亦よく彼が特技を發揮したるもの少なからず。本圖の如きは即ちよくこれを證するものといふべし。

一蝶初年の作には、藤信香の落款を用ひ、次に剃髮して、潮湖と稱し、後三宅島へ流刑に處せられてより北窓翁。一蝶等と改稱せり。彼が遠謫の刑に處せられたる原因に就きては諸説ありて、百人女蔭の繪本中、將軍を諷せしものあるに起因すとの説有力なれども、實は日蓮宗不受不施派に關聯せるものゝ如し。これ元祿十一年十二月のころなり。彼は孤島に流され、日々慈母を思ふの情切なりければ、自ら窓を北方に開きて望郷窓と稱し、これより北窓翁の款識を用ふ。また一蝶の號を用ふるに至りしは、彼が一口前裁の草花に、胡蝶の來り戯るゝを見し時、偶赦罪の快報に接し、喜悅の餘り一蝶と改名せるなりと、英一は赦罪後、母方の氏花房を冒して、英の一字に約せるなりといふ。彼實に孤島中に寒苦孤獨の生を營み、憂愁の内に星霜を経ること十二、寶永六年九月江戸に歸り、深川宜雲寺に寓居せり。これより一蝶の畫名都下に喧傳せられ、淺妻船圖、女達磨等最も世に歡迎せられたり。彼が狩野の舊格を墨守せずして、自己の畫想を自由の天地に飄逸磊落に發揮し得たりしは、偉大なる點といはざるべからず。また彼は諸藝に通じ、特に文才ありて、書道は佐々木玄龍に従ひ、俳諧を芭蕉に學び、其角嵐雪は其の風雅の友なり。かの朝妻船の歌の如きは人口に膾炙せられたり。また紀文奈良茂の如き遊客に愛せられて、花街柳巷に耽溺したることもあり。かくて一蝶は享保九年正月十三日歿し、白銀二木榎承教寺塔中顯乘院に葬る、行年七十有三。







勵宗萬筆 御製澄海樓詩意圖

紙本 鑒六寸六分 横二尺四分

Painting of a Panoramic View of Chokai Temple of China. By Leisoban. (18th Century)

田中慶太郎君藏

清朝興隆の期に當ては、聖祖、世宗、高宗の明君三世相繼ぎて、武功の盛んなること前古に超出し、學術技藝の進歩亦最も著しき時代なり。然も其の盛は高宗の乾隆年間を以て其の最高潮と稱すべし。されば丹青界に於ても亦この期を以て黄金時代とすべく、加之、宋明の畫院に倣ひ、内廷供奉の畫人を置きて、或は宮廷の用を命じ、或は古今の名書畫を鑒定せしめ、且つ畫家の保護獎勵の道頗る到れるものあり。而してこれ等の畫人が畫く所、御製の詩意によれるもの多く、所謂御題と稱するものにして、自己の能事を盡し、滿身の精力を傾倒して畫けるものなり。本圖の如きは、即ちこの種に屬するものの一なり。

勵宗萬は字を衣園といひ、康熙六十辛丑の年進士となれり、即ち聖祖の晩年に出でし人にして、其の盛時は世宗、高宗の世にあり、本圖は乾隆八癸亥九月に成れるものにして、御製の詩意をされるもの、即ち御製敖漢玉瀑詩意圖、御製醫巫閭山詩意圖、御製千山詩意圖と共に全四卷中の一なり。高宗の睿鑒によりて、題を賜はれるものにして、何れも細密巧緻を極め、筆々深慮して、毫末の粗慢是れなからんこと、に腐心せるもの、如し、御製を題したるものにあらざれば、如何ぞかくの如きを得んや。而して嘉慶鑑賞の印に加ふるに、他に嘉慶御覽之寶と刻せる印章あるに徴すれば、高宗に次ぎて立てる仁宗の御覽の榮を得たるものなるを知るべく、この繪は數十年の後に於て益々光輝を放ち、榮譽を荷へるものなるを知るべし。また以て清朝の盛時に於ける宮廷畫の一斑を窺ふ好資料となすことを得ん。



View of Chokai Temple of China

佩  
宗  
萬  
年  
聯  
璧  
新  
猷  
對  
青  
意  
圖

聯鑒齋詩集意圖



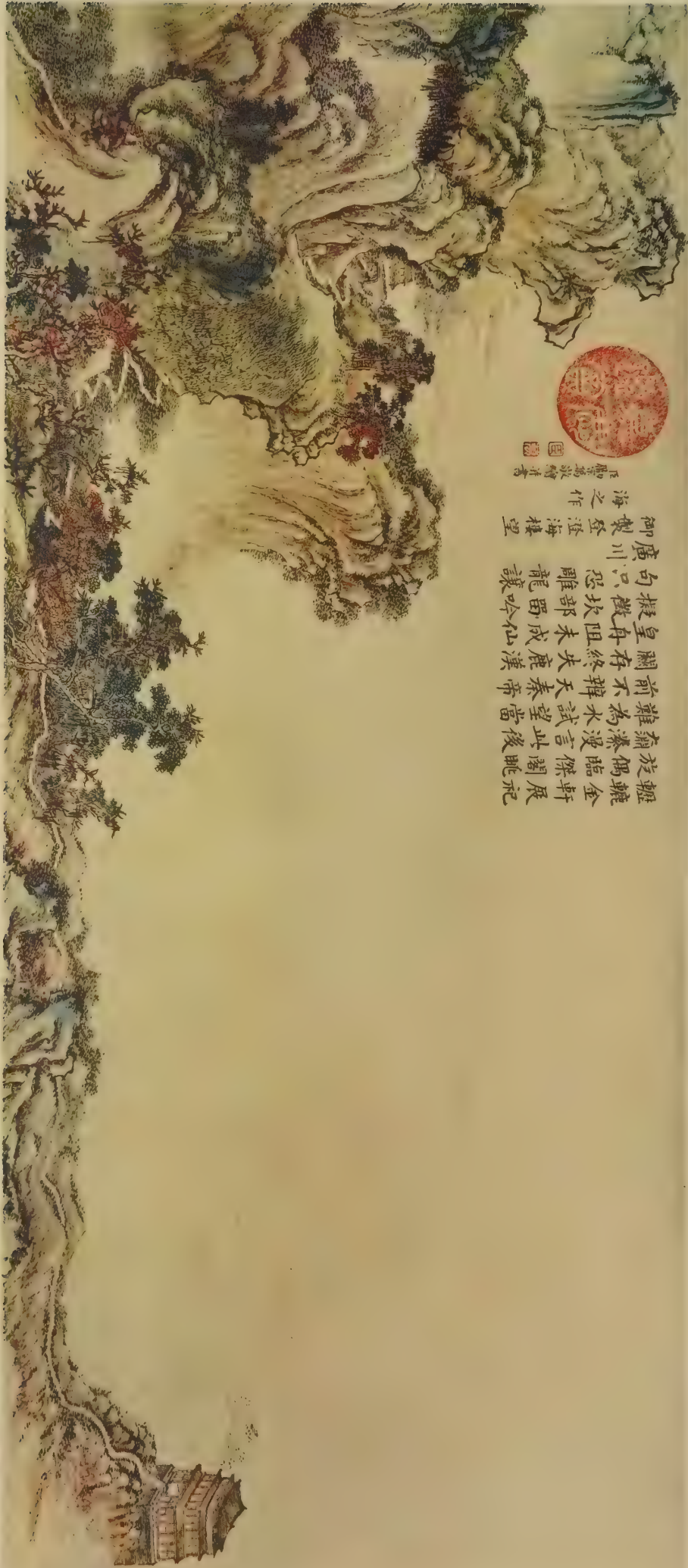
盤龍金軒展  
旋偶臨閣眺  
痛秦漫言此  
難為水試望  
前不辨天秦  
關存終失鹿  
皇舟阻未成  
擬微坎部西  
句只恐龍讓  
廣川

御製登蓬海樓望

海之作

正德嘉祿元年書

國









岡本秋暉筆雪中南天圖

紙本 竪九寸五分 横一尺八分

Painting of the Nandin in the Snow. By Shuki Okamoto.  
(1784—1861)

須藤傳次郎君藏

岡本秋暉は祐之丞と稱し、晩に秋翁と云へり。幼より丹青の道を好み、始め圭齋の門に入りて、山水人物を専らとせんせしが、小田原侯の藩臣に列するの故を以て、俗事多忙にして、人物の故實有職を考究するの暇なく、又山水の勝景奇蹟を擅に遊覽すること能はざるを以て、茲に自家研究の方針を確立し、専ら花鳥を題材として其の眞を寫さん欲し、或は華山に師事し、或は明清諸大家の畫蹟を參酌し、汲々として精勵し、自家獨創の構圖を作り、用筆の練磨にも亦深き熱誠を籠めければ、遂に一新機軸を出すに至り、花鳥畫の大家となれり。されば細密なる寫生畫に於ては、よく花卉蟲禽の眞を寫し、其の妙趣を發揮し得たり。且つ筆力超越したりければ、特に草畫に妙を得たり。故に謹嚴周密の畫は正に彼が日常の修養を披瀝して、餘人に卓越したるに共に、輕々に筆を下したる草畫に於ても、亦輕妙逸脫の趣に富み、彼が超凡の畫技を有したるを知る。

本圖は畫帖中の一圖にして、靈妙の落筆賞するに足るべく、徒に筆を弄することなく、自然の風趣を表現し得たりしは、沒骨法に於ける寫生畫として、眞に上乘のものに稱すべし。また近世に於ける巨匠として、畫壇の一角に重をなすに足るべし。



寒更に雪のふりおど骨をこけむる寫生畫を丁眞の土乘のものに辭せしむる、また我州の地をさす

是、五、六の二回を以て同作と論ずる對馬より輸入した銅と其の神々の御奉仕に請ふ草紙の爲すと云

其時の海軍として活動し、自來國師の海軍司令官に就任し、海軍の発展に貢献した。

醉を事とし甘ふに甘くなく、小田原封の藩臣に匹するの姑を以て、御事を計りて、丁人傳の姑實を卿を

陸龜翁大雅集

114

Training of the Nardin in the Snow. By Shuki Okamoto

孫本 壘 水 廿 五 食 湯 一 只 八 食

圓木并調竿  
雲中南天圖

匪類駭大瀕海











紅蓮水禽圖

絹本 竪三尺七寸 横一尺五寸

Painting of the Water Fowl and the Red Lotus. (14th Century)

高橋義雄君藏

花鳥畫は唐朝の盛時に於て、既に幾多の妙手によりて作られたるが如きも、其の未曾有の發達を遂けしものは、實に五代にあり。當時南唐には徐熙の一族あり。西蜀には黃筌父子あり。共に斯界に光華を發揮して、後世花鳥畫の範を立て、我國に於ては、古く巨勢金岡最も著名なりければ、後世の作物にても、花鳥の名畫あるときは、名を徐熙、黃筌或は南唐の顧德謙、或は本邦の巨勢金岡等の巨匠に籍りたるもの多し。本圖の如きは即ち金岡筆と傳稱するものにして、其の系を支那に發せるを見るべし。今其の類品を求むれば、知恩院所藏の徐熙と稱するもの、侯爵井上馨氏の珍藏にかゝる顧德謙筆と稱するもの、法隆寺傳來の巨勢金岡筆と稱する屏風等にして、何れも圖樣殆ど相同じく、紅蓮に配するに水禽を以てし、も同一圖より胚胎せるを知るべく、支那古代の代表的花鳥畫に淵源すること明瞭にして、即ち徐熙、黃筌、顧德謙等の名に假託したるもの多き所以なり。

抑も法隆寺の蓮池水禽の屏風は、本圖と同じく、金岡筆と傳へらるゝ程ありて、極似せる所多く、其の傳稱の因縁も淺からざるものあり。作製年代に就きては、異説なきにあらざるも、藤原後期の作ならんとの説多數を占む。今此圖を観るに、結構雄拔、賦彩濃麗にして、技巧細密を極め、よく紅蓮と小禽との對映をして遺憾なからしめたり。亦古名畫の一として推賞するに足るべく、以て世の賞鑒に値すべし。



丁銀賞をふり給ふへ、以て丁州の賞銀を動かすへ。

[illegible]

一、（一） 本圖の中心に、**江表金剛寺**の**月**と**日**と**蘇**とあるものあり。本圖の中心に、**江表金剛寺**の**月**と**日**と**蘇**とあるものあり。本圖の中心に、**江表金剛寺**の**月**と**日**と**蘇**とあるものあり。

20  
21  
22  
23  
24  
25

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525











谷文晁筆 加官進祿圖

紙本 竪一尺一寸四分 横五寸五分

Painting of a Chinese Ceremony to advance his Position in the Imperial Court.  
By Buncho Tani. (1763-1840)

小山三巳君藏

谷文晁は近世に於ける丹青界の覇者にして、よく森羅萬象を捉へて、縦横に揮灑し去る所、筆墨を弄して、彼の右に出づるものなし。一度筆を下せば、龍攘虎擊の活躍も、溫雅幽寂の靜態も、意の儘に筆これに従ひ、千山萬嶽忽ち成る、文晁は唯徒らに天稟の畫才を縦横に揮ひしにはあらずして、彼が畫技の習得には確乎として動かすべからざる根底を有せり。彼はあらゆる諸流に涉りて研鑽の功を積み、よく其の長を取りて、自家藥範中のものごなし、殆んど和漢古今に及ばざる所なし。本集輯載せる加官進祿圖の如きは、即ち明人仇英の手法に擬して作りしものにして、彼が學修の廣きを想ふべし。款識に文政四年辛巳夏月とあるによりて、彼が歿せる天保十一年七十八歳より逆算すれば、正に五十九歳にして、技圓熟の境に入り、彼が黄金時代の花を開ける最盛時期の筆なるを知る。よく仇英其の人の風格を傳へて、謹嚴に筆を下し、賦彩沈厚、そゞろに古畫を想起せしむるに足るものあり。然れどもまた文晁特有の様式を發揮し、他の筆意に擬して猶自己の修養を披瀝したるは觀者に少なからざる興趣を湧發せしむるものあり。文晁の作、豪放勁拔なる水墨山水頗る多く、巧麗周密なる花鳥人物、青綠山水等少なからざれども、本圖の如き特殊のものに至りては類品少く、繪畫史の資料として頗る重要なものごいふべく、鑒賞界も亦珍品として賞鑒飽かざるものなり。







武政公卿時夏月  
寓拙仇吳某意  
吳某









松野親信筆 美人圖

絹本 竪一尺九寸一分 横九寸一分

Painting of a Beautiful Woman. By Chikanobu Matsuno.  
(18th Century.)

清野長太郎君藏

松野親信は伯照軒又は伯笑軒とも稱し、懷月堂の末葉中傑出せるものなり、抑懷月堂派は浮世繪派中の特殊なる一別派にして、他流派との關縁薄く、最も烏居派に近似し、菱川派に亞ぎて起れるものなり。其の祖を安度といふ。この流を汲めるものに、度繁、度辰、度秀、度種等あり、皆懷月堂末葉と署名すれども、猶この他に、長陽堂、安知、梅翁軒、永春、梅祐軒、勝信、東川堂、里風、柳子軒、菱川師保、古山師胤、墨流軒、空明堂、書感堂等ありて、伯照軒親信は、これ等諸家中の特に優逸せるものなり。本集繙にこの祖安度の圖を收めしが、今これを取るは、實に本圖がよく懷月堂派の特長を發揮したるものあればなり。今本圖を見れば、一人立の美人の漫然として佇立するが如き姿態をなし、何等の妙趣なきが如くなり。雖この構圖こそこの派の特に好んで多く採用したるものにして、殆ど千遍一律の憾ありて、嫌焉たらざるものなきにあらざるも、抽出したる美人を表現せんとするに當りては、また一便法とも稱すべし。且つ剛朴なる描線と莊重艷麗なる賦彩とは、この派に常用の富麗豐美なる紋様をして、最も彩華に富むものたらしめ、所謂元祿の盛時并に其の後に於ける豪華なる風尚を寫すに適應せしめたり。即ちこの派が浮世繪派中、一特色を放つて、一別派として存立したる所以なり。本圖は寶永正徳頃の遊女の風俗を寫せるものにして、眞にこの派の特長を見るに屈竟の材料たるを失はざるなり。









伯照軒青野親信画







鈴木其一筆 水郷小禽圖

絹本 竪三尺七寸 横一尺五寸

Painting of a Water Fowl at the Summer Season. By Kitsu Suzuki.  
(1796—1858.)

子爵 松平忠正君藏

徳川時代は日本獨特の文明を發揮したる時代にして、畫界も亦種々なる特色を以て絢爛の美を競へり。内にも宗達光琳の一派は、奇想天外より落つるの觀あり。其の流は抱一となり、以て其一に及べり。其一はよく師の衣鉢を傳へて、琳派の末流に猶光彩を失はざりしものといふべし。

本圖は彼が最も瀟洒たる筆致を以て畫けるものにして、宗達光琳の好くする所を稍其の趣を異にし、抱一に學び來つて更に自己の趣致を發揮したるを見る。これを嚮に本輯收むる所の濃麗莊重なる猩々舞圖と比較せよ。彼が頗る多方面の趣味を解せるを知るに共に、技巧またよく畫圖の表現に適應して變化せるを見ん。彼は嚴格なる題材を取りては、謹嚴に筆を下し、瀟洒なる構圖にありては洒脫なる筆致を以てして、未だ甚だしき一典型に陷らざるなり。然も彼が特技は彼にあらすして、寧ろ本圖の如き、描寫自在の天地にあるを知らん。今兩者を比較し來れば、また一種の興趣に動かさるゝものあるべく、またよく抱一の筆意を繼ぎて、師名を辱めざりしを賞揚すべきにあらずや。





(1)  
ミ  
リ  
ル  
ハ  
J  
C

高田和升君日本經濟の発展とその開拓ニシテ工業を衣鉢となす許すを以テ感謝

平忠壯

(1796-1828.)

Painting of *Water Flow at the Summer Season*. By Kikufu Suzuki.

櫻木 翌三月十七日 謝一八日

餘木其一平水灣小禽圖

水邊小舍











歙形紹眞筆 七月七日花扇圖

絹本 竪三尺五分 横一尺二寸三分

Painting of A Beauty with her Attendants in the Festival of the Star Vega.  
By Tsugusane Kuwagata. (1764-1824)

星野日子四郎君藏

歙形紹眞初名は赤羽三二又次に作る郎、或は修して三二と謂ふ。字は子景、浮世繪を北尾派の開祖重政に學び、其姓を偏諱を受け、北尾政美と稱す。祖父源左衛門昭明は下野人、江戸に出で疊工を業とす。男子なし。駿河人田中權助の男義珍を養ひ、其女ふきに妻はせ、通稱を職業を襲がしむ。義珍三女一男を生む、紹眞は即ち其第二子にして、明和甲申年を以て江戸の地に呱呱の聲を挙げたり。其夙慧なる齡僅に三五、既に其挿繪本を公にせり。爾後其技益々進み、挿繪に錦繪に其彩筆を揮ひ、當時彬々たる諸名工と相伍して、盛名を天下に馳するに至れり。然るに味者察せず、猶彼を舊阿蒙視し、呼ぶに疊屋の三公を以てする者ありしかば、飄逸洒脫の彼は、同音の雅名を撰み、自ら杉阜と稱し、又蕙齋と號せり。天明七年正月既に此號あり天資超逸、神識高明、奇才縱橫、機智全涌、然も最も向上心に富める彼は、徒に先縦を追ひ様によりて胡蘆を畫くの愚を爲さんや。遙に橘守國を慕ひ、繪畫の普及并に工藝應用に苦心し、寛政五年十二月諸職畫鏡を刊し、續て彼の不朽の名作、淡彩略畫及び蠶畫を公にせり。是れ彼が天稟の才を以てし、和漢洋の學識古今雅俗の藝術との消化醸生せる靈液の滴々に外ならず。其他眞景一覽圖、組上燈籠の版畫、淡濃二色の墨摺、花鳥、錦繪等の如き、彼の巨腕の觸るゝ所、忽ち面目を一新し、幾多の名匠をして、甘んじて仰ぎ範を取らしめたり。かくて寛政六年五月二十六日美作津山藩主松平越後守康哉に仕へ其抱畫師と爲る。然るに彼の師資相承の浮世繪は官邊の重んずる所にあらざれば、士分の關係上、繪師の正統派と目されたる狩野家の門下に名を列するの必要に迫られ、同九年六月十一日心ならずも、北尾氏を排し、祖母祖父源左衛門妻きんの生家歙形氏に改め、實名紹眞を用ゆ。同十七日狩野養川院に入門を命ぜらる。蓋し祖母は大阪人、歙形十治郎の女にして、其系は祖監物孝重越後の英主上杉謙信に仕へたりと稱す。此系圖は偽作紹眞の越後或は京都人との誤傳せらるゝは畢竟之に基くものならん。文化九年正月十八日更に名を羽赤と改む。舊姓赤羽を顛倒せるなり。子無し。文政三年妻甥赤子紹意脇坂侯臣今永住町を養ひ嗣とす。同七年三月二十二日病歿す。享年六十一。淺草新寺町將軍山蓮華寺密藏院今永住町十八番地に葬る。明治四十三年十二月十七日豊多摩郡野方村同寺新墓地に改埋す。諡號を彩淡蕙齋居士と謂ふ。紹意箕裘をつぎまた畫を善くす。

今本圖を見るに色彩の富麗、風趣の古典的にして、然も其の技巧の土佐狩野浮世繪諸派を包容渾融せる高尚莊重の態を、彼が前半生の通俗なる錦繪の後半世の輕妙洒脫の淡彩略畫式とに比するに、殆んど別人の手に出づるが如く、技巧圓熟、殊に筆端の妙に至りては、誰か三嘆の聲を禁ずるを得んや、以て才人の伎倆往く所として可ならざるなきを見るべきなり。懣むらくは詳論の餘白なきを。附言、本解説は蕙齋研究家星野日子四郎君の執筆を煩はせり









仙真







谷 文晁筆 閻魔王圖

絹本 竪一尺三寸四分 横九寸七分

Painting of the King of Hades who Judges and Punishes the Departed Souls.

By Buncho Tani. (1763-1840).

安藝秀治君藏

江戸三百年の治世に、絢爛たる花を開きし文化文政の大御所時代は、眞に日本文化の粹を蒐め、文學美術鬱然として興隆せるなり、この間に立ちて、舊來の諸畫派を研究して、採長補短を行ひ、自己の偉才を以て、これを渾融して、清新なる一派を開き、江戸の丹青界に牛耳を執り、京の圓山四條派とよく拮抗したるものを谷文晁とす。

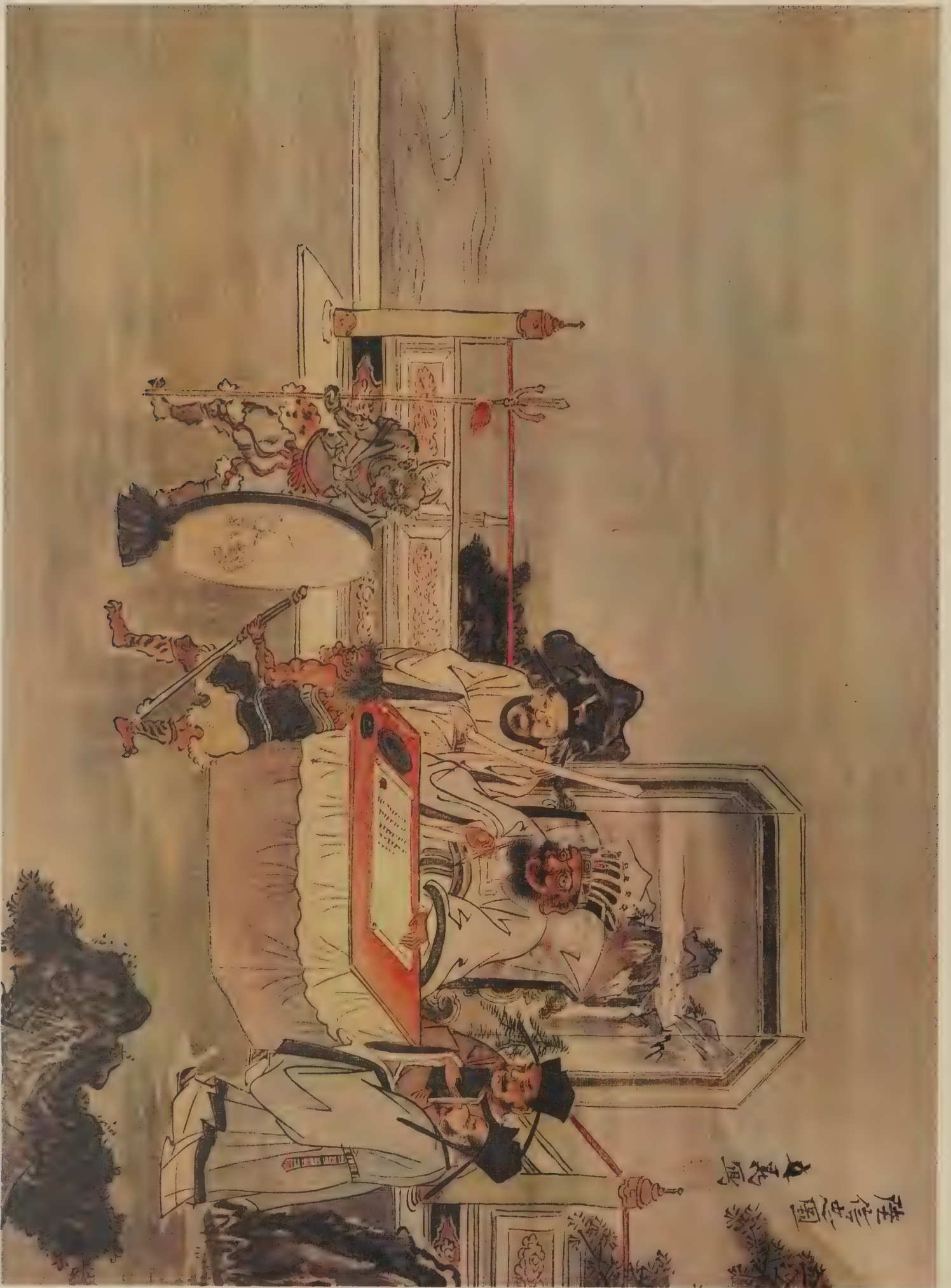
文晁名は正安、文晁は其の字なり。通稱は文五郎といひ、一如居士、畫學齋、無二庵主、蜷叟等の別號あり。好んで富岳を寫せるを以てまた寫山樓とも稱せり。江戸の人にして、初め加藤文麗に就きて畫を學び、後渡邊立對に従ひ、また鈴木芙蓉を師とす。而して更に、宋元諸家の風格を學び、徒らに規倣を事とせず、自ら工夫發明する所ありて、揮灑縱横、筆端の動く所、立所に千山萬岳成り、雲烟浮動の妙、膏潤秀逸の趣に富み、龍攘虎擊の活劇も、目睫の間に描かれ、行く所として佳ならざるなく、豪宕奔放の筆、また味ふべし。而して一度思を潜めて畫けば、結構緊密、設色古雅秀麗にして、遙かに明人の壘を壓す。青綠山水然り、人物花禽また別個の風格あり。當時の畫壇に嶄然として頭角を見はしたるもの故なきにあらざるなり。文晁の如きは、實に近世畫界の最大偉人にして、三百年來江戸の藝術を渾然として一身に收めたるは、彼が偉大なる所以なり。本圖は陸信忠圖に倣へるものにして、未だ十分に彼が技倆を窺ふに足らず。雖、また以て其の一半を知るべし、かくの如くなれば、文晁は畫技を以て、田安家に仕へ、また松平定信に寵用せられたり。定信の編纂にかゝる集古十種は、即ち文晁が命を受けて畫けるものにして、其の他著はす所、本朝畫纂、畫學大全、日本名山圖會、書畫觀甲、歷代名畫譜、寫山樓畫本、松島眞圖等にして、何れも世に行はれたり。天保十一年十二月四日卒す、年七十八。義子文一、山水花鳥を善くす、惜むらくは早世せり。實子文二、また山水に長じ、家法を學ぶ、其の他兄弟姉妹妻女等深く心を繪事に留め、藝林に其の名を稱せられたり、盛事と謂つべし。







陸信忠園  
五老圖









岡本秋暉筆 四季花鳥圖

絹本 竪四尺四寸三分 横一尺三寸三分

Painting of Flowers and Birds in the Four Seasons. By Shuki Okamoto.  
(1784-1861).

藤懸靜也君藏

秋暉は小田原の人にして、世々藩主大久保侯に仕ふ。幼より丹青の道を樂み、初め蹴形圭齋に學び、後ち渡邊華山に従ひ、畫技大に進む、寫生を主として花鳥に翫然として頭角を現はし、椿椿山と共に稱揚せられたり。本圖は四季花鳥を一圖に按配したるものにして、優麗逸美の趣致に富み、梅花芙蓉川骨を寫して、紅葉せる薦をこの間に纏繞せしめ、よく布置經營の妙を盡し、敢て吾人に不自然の感を與へしめざるは、誠に嘆賞に値すべし。これ安政二乙卯七十一歳の時の筆にして、老鍊暢逸の筆致は、誰かかゝる類齡者の手に成れるものと思ふ。以て彼が技倆の卓絶せるを知るべし。

秋暉の逸事に就きては、忽諸に付し能はざるものあり。即ち師華山の國事の爲めに捕へらるゝや、秋暉大に驚き、惶馳せて師を尋ねしに、既に網輿の中にあり、更に就きて對面を求むれども許されず、聲を放つて號泣し、網輿に尾して東海道を下る。時々輿夫に告ぐるに其の意を以てす。川崎驛に於て、一老輿夫深く秋暉の志に感じ、間を窺ひ密に引て師と對面せしむ。秋暉感極まつて涙下る。華山また秋暉の至情に泣き、將來を勵まして別る。實に秋暉はかくの如く師の恩義に感じ、情義の熱烈なるものあり。其の作る所他に卓越し、一家の風格を拓き得たるまた緣由する所あるを知るべし。而して秋暉の念頭、終生師を忘るゝこと能はざりき。下總古河に嘗て華山が蘭學の師として仰ぎし鷹見泉石あり、秋暉乃ち古河に遊び、先師を追懷して泉石と懇談せしといふ。本圖は即ちこの期に際し、特に同藩の士藤懸氏の爲に作る所にして、これに依るも以て筆者の風格高きを想見し得べし。秋暉は文久元年九月を以て歿す、年七十八。



[illegible]

Painting of Flowers and Birds in the Four Seasons. By Shiki Okamoto











柿本人麿像

絹本 竪二尺九寸 横一尺四寸

Portrait of Hitomaro Kakinomoto. (16th Century.)

侯爵徳川頼倫君藏

人麿の像を畫くこゝは、頗る古くより行はれたる所にして、即ち古今集の序文に於て、歌聖とて激賞し、人麿崇拜の熱を生じたるに基く。十訓抄には、粟田讃岐守兼房が歌道に熱中して、人麿を念ずるの餘り、遂に彼を夢みて、畫像を繪師に畫かしめ、朝夕禮拜せしが、其の將に死せんとするに及びて、白河院に奉りしこゝ見えたり。然るに其の後これを傳寫し、屢人麿の影供養を行ひしが、就中元永元年六月十日、顯季卿が、六條東洞院亭にて行ひしもの最も著名なりとす。この風潮に伴ひ、一方に於ては、三十六家推重の風、漸く盛んなるに及び、其の像を畫くこゝ益々行はれ、鎌倉初期より足利時代を通じて、近世に至るまでこの風盛んなりき。

本圖は即ちこの傾向の下に畫かれたるものにして、筆者は土佐光信と傳へたれど、『ほのほのこゝ』云々の歌は、本圖は像のみを現はせり。近衛種家公の筆にかゝり、光信より稍後の世の人なれば、繪は光信にはあらで、さる土佐家の名手の筆に成りしものなるや必せり。或は光信の子光茂の筆ならんとの説もあれど定かならず。種家公は尚通公の男にて、永正年中の人、飛鳥井流の書法を父に學びて、當時に名聲高かりき。本圖の如きは足利末の歌仙畫として、頗る出色のものに稱すべし。















呂紀筆 花鳥圖

絹本 縦五尺 横二尺七寸五分

Painting of Flower and Birds. By Roki (15th Century.)

子爵 大河内正敏君藏

呂紀字は廷振、樂愚と號す。寧波の人なり。花鳥畫に巧妙の特技を有し、明畫中花鳥畫にありては、殆ん  
き獨歩の境を示せり。明畫錄、無聲詩史等によれば、彼が經歷を知るに足るものあり。

呂紀は初め邊景昭に學び、後唐宋諸家の法を摹倣し、始めて自家の妙所を發揮するに至れり。弘治年  
中、林良と共に孝宗に徵されて、仁智殿に事へ、錦衣指揮使に至れり。當時の畫家彼が榮譽を羨望せざ  
るものなかりしといふ。實に呂紀は黃氏體を祖述したるものにして、妍麗巧緻の院體を作り、禽鳥の  
類、殊に鳳鶴孔雀鷺鸞の類に至りては、設色鮮麗、生氣奕々、當時其の名聲を擅にしたり。呂紀は嘗に翎  
毛を巧にしたるのみならず、また山水人物俱に妙を盡せり。

斯くの如き名手なれば、夙に我國に於ても呂紀の令名噴々たるものあり、且つ東山時代に漢畫賞鑒  
最も流行しければ、當時明より來舶されたる畫幅、尠くにはあらざりしなり。呂紀の盛時は即ち我が  
東山時代に稍後れたり。雖、彼の作品は大に我國に歡迎せられたれば、我國に入りしもの少なから  
ざりしなるべし。現時呂紀と傳ふるもの甚だ多きに見るも、彼が噴々の聲譽を我國にまで、舉げしを  
知るべし。然も優秀なるもの甚だ乏しきは、遺憾の至りなり。本圖の如きは、大幅双對の一にして、丹木  
小禽を巧に配して、布置整然、構圖に苦心の跡を見るべく、よく彼が特色を發揮したるものにして、呂  
紀の様式を考察するに、充分なる資料とすべし。



[illegible]











沈南蘋筆 花鳥圖

絹本 竪五尺五寸五分 横一尺五寸五分

Painting of the Golden Pheasants. By Chin Nanpin.  
(18th Century.)

男爵 都筑馨六君藏

清朝の繪畫は著しき發展を遂けず、萎微振はざるの憾ありしが、花鳥畫に於ては寫生盛んに行はれ、流風數派、精を研き妍を競ひしかば、榮然として其の妙技を發揮するに至りぬ。而して近代人寫生畫に深き興趣を感受するもの多數を占むるに及び、支那畫の命脈はこの派によりて維持せられたるやの感あり。而して花鳥畫の妙技は遠く西歐にまで喧傳せられ、我國また其の影響を蒙るこゝ頗る大なり。南蘋は即ちこの寫生を標榜して立てる錚々たる驍將の一人とす。

抑も清朝の花鳥畫には幾多の流派ありて、黃氏體鉤染の古法に依るもの、或は前代周之冕等の勾花點葉體を繼承するもの、或は純沒骨體の新様を用ふるものあり。南蘋の畫風の如きは、實にこの鉤花點葉法を最もよく寫實の域に進ましめ、また清新なる沒骨法によりて、巧緻精麗を極めたるものと稱すべし。

本圖の如きは彼が花鳥に於ける技倆を窺ふに足るものにして、賦彩は妍麗精緻を極めて、筆致穩雅、形似よく整ひ、薔薇の花瓣の如き將に水滴下らんとするの感あり。寫生の奥義を理解し、技神に入るものにあらざれば、好くする能はざる所なり。宜なるかな。彼一度長崎に來遊するや、我が畫壇は爲めに激勵誘發せられ、茲に一新様を生じ、熊斐、黒川龜玉、宋紫石等の巨擘これより續出するに至り、爾後花鳥畫に彩筆を揮ふもの何れも沈氏の感化を蒙らざるものなきに至れり。豈南蘋の偉大なる影響に驚歎せざるを得んや。



もの事を二至はり。豈南藤の霜火なる邊際ニ凝結せざるを期しんや。

夏見袖ニ來並せるや、非は満腹おれとニ嬌態を發せしは、茲ニ一殊斜を半じ、顔装、  
ふとせるの怨あり、哀半の奥義を腹釋し、封喉ニ入るものこそとちおれくする  
ことより、丁に凝結を期せざるものこそ辭をへし。

せるもの、近お膝對骨節の海淵を

淵の一人とす。

淵ニちり離れざるは、非固を式し

淵おこの新にもり丁凝結せしは、さるやの怨あり。而して丁非凝結の妙封お蓋し、西  
且の越封を發射するに等り。而して丁非人哀半、齒ニ新を非射せ、怨をせるもの  
を、凝結おるもの怨ありしは、非凝結ニ非丁お哀半、齒ニ非おけ、新風凝結を

Portrait of the Golden Immortal. Dr. Chin Nambu.











宋紫石筆 雨中雞圖

絹本 堅三尺九寸 横一尺七寸六分

Painting of a Cock in the Rain. By Sōshiseki.  
(1712—1786)

藤懸靜也君藏

清人沈南蘋の長崎に渡來するや、我が繪畫界は彼が偉大なる感化を蒙り、精緻濃麗なる寫生畫は頓に流行を來すに至り、熊斐之を傳承し、茲に清新なる一流派を創め、其の畫風長崎の小天地にのみ屈蹙せずして、早く江戸に傳はれり。これ黒川龜玉の力なりし。雖、惜むべし、早世せしかば未だよくこの流を興すに足らざりき。宋紫石出づるに及びて、よくその畫風を江戸に普及せしむるに至れり。

宋紫石は楠本氏、字は君赫、通稱幸八郎、雪溪又は霞亭といひ、後雪湖と號せり。江戸の人にして幼より畫を好み、長ずるに及び長崎に遊びて熊斐に従ひて畫を學ぶ。是の時に當り清人宋紫岩亦長崎に來遊す。即ち紫石彼に畫法を質し、よく其の法に精熟するを得て、南蘋の筆意をも會得し、遂に宋氏を冒して名を紫石と改めたり。山水花卉走獸翎毛等其の巧緻を極む。著はす所、宋氏畫譜及び畫藪會畫あり、世に行はる。紫石人として爲り強直質朴、敢て高貴に阿ることなかりしといふ。日本橋南四丁目に住し、天明六年三月十一日歿す、年七十五。或はいふ七十二。淺草本願寺中徳本寺に葬る。子紫山家を嗣ぎ、家法を墜さず。門人諸葛監、董九如、晁有輝等最も著はる。本集收むる所の雨中雞圖は彼が精細巧緻を盡せる筆致と濃麗精密の賦彩を以てせる花卉翎毛圖の代表的傑作といふべく、彼が遺作中稀有のものとして稱すべし。歎識に辛卯初夏とあるによりて、明和八年彼正に六十歳畫技圓熟の境に達せる折に成れるものなり。雄々しき家雞の風雨に凜乎たる雄姿を表したる構圖には、觀者は家雞以外に或る偉大なる含蓄に刺激せらるゝの感あらん。實に紫石は嘗に細巧なる寫實の末節にのみ走りたるものにあらざるを知るべし。以て彼が理想の那邊に存したるかを忖度すべきにあらずや。



遊戯叢書中辭林(一)と(二)

ふこまゆしつふ。II

其の若く熱燦せざるを器丁、南麩の筆意をも會器丁、數り米刃を器丁、丁を多量に用ひて、短く、山

昇をふりぬ

三ノ朝お休り。こ休黒川藤王のたふりしを、藤智ひへし早世せしを、お未だもこの荒を興せし虽  
 來せし至り、彌斐のち朝承し、茲に青祿なる一荒起る隙也、其の盡風是神の小天賦のち、出雲守を了し、早

[illegible]

(1515-1580)

Painting of a Cock in the Rain. By Sōshiseki

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8











岡本豊彦筆 四條夕涼圖

絹本 竪四尺 横一尺八寸

Enjoying the Evening Cool at Shijo River-Beach. By Toyohiko Okamoto.

(1773—1845)

渡邊溫行君藏

四條派は圓山派に次ぎて起り、世に行はるゝこと反つて圓山派に過ぎたり、四條派は吳春に出づ、其の家京都四條通東洞院の東にありしを以て、世人この畫風を稱して、四條派と呼べるなり。而して其の門葉隆昌を極むるに至りしもの、實に吳春の末弟景文と岡本豊彦との力に俟つもの多きなり。豊彦字は子彦、荳村、鯉喬、澄神齋等の諸號あり、通稱は司馬、備中の人、京に移り四條通東洞院の東に住す、吳春門下第一の俊秀にして、景文と並べ稱せられ、人物花鳥行く所とて可ならざるなく、特に山水に於て、其の妙技に接することを得べし、文政天保の交、京都に盛名を馳せたるもの、實に豊彦と景文との二人とす。當時岸駒猶健在せりと雖、彼は遠隔の地に名聲ありて、都下においては、反つてこの二人に及ばず、京の丹青界は、遂に四條派の一大勢力に壟斷せらるゝに至れり。剩へ豊彦の門下には、俊才乏しからず、京に田中日華、鹽川文麟あり、江戸に柴田是真ありて、益々この流をして、天下に行はしむるに至れり。

本圖は京都四條の夕涼を寫せるものにして、瀟洒落々たる筆致を以て、輕妙に揮灑し終りて、何等の苦澁を留むるなし、敢て彼が傑作として推賞すべき程のものにあらざるも、かゝる輕々に筆を下せるものに於て、亦彼が技倆を見ることを得べし。



Enjoying the Evening Cool at Shijo River Beach. By Toyoniko Okamoto

石溪集











住吉具慶筆

雨舍圖

紙本 竪九寸七分 横五寸四分

They take Shelter under a Deva Gate. By Gukei Sumiyoshi.

(1631—1705)

岡崎正也君藏

土佐家の正流は京都にありて朝廷の繪所預となりしが、狩野家と共に幕府に仕へ江戸にありて、西京都の本宗に對峙の勢力ありしものを住吉家となす。

住吉家は住吉廣通に出づ如慶と稱して世に顯はる、具慶は即ち如慶の長子にして寛永八年に生る、内記廣澄と云ひ法眼に叙せられ父に次ぎて天和二年江戸に移り住み將軍綱吉に仕へこれより代々幕府の繪師となり、具慶は又鎌倉時代の大和繪に深く憧憬せるものにして、殊に光長の古風を慕ひ、人物鳥獸を畫きてよく生氣に富めり、父子相次ぎて技神に入れり、住吉家の確乎たる基礎を作りしもの蓋し故なきにあらざるなり、かくて具慶は名聲を四方に轟かせて寶永二年七十五才にして歿す。

雨舍圖は一小品なり、雖構圖周密人物個々の姿態も頗る面白く雨宿の狀想見すべきものあり、設色また巧妙にして、諸色を互に相映發せしめ觀者をして特に鮮麗優美の感を懷かしむ、具慶が技倆凡ならざるものを見るべし。

惟ふに住吉家は鎌倉初期の名家慶恩の後を嗣けり、稱する程ありて固く大和繪の古法を守らんと欲して努力せるものあり、然れども猶纖巧婉柔に陷れるは時勢の然らしむる所なりしなるべく、末流に至りては其の弊に堪へざるものあり、唯如慶と具慶と巍然として傑出せるものあり、また畫界の傑物たるを失はざるなり。















谷 文 晁 筆 朝 陽 浴 鶴 圖

絹本 竪四尺二寸三分 横二尺二寸三分

Painting of a Crane which take a Sea-bathing, in the morning.

By Buncho Tami. (1763--1840.)

村上濱吉君藏

本輯嚮に文晁の代表的作品の一として、仇英の筆に擬したる人物畫（加官進祿圖）を收載したりしが、茲に花鳥の佳品を收む。即ち朝陽浴鶴圖是なり。本圖は布置警拔、設色莊麗頗る豪快の氣に富む。雖、元來文晁が腦漿を絞りて作りし構圖にはあらずして、世に蟠桃海鶴圖と稱して、往々畫家の筆に上りしものなり。然も同圖様の畫に於て、文晁の筆は嶄然として頭角を顯はし、巍然として群小を睥睨するが如き觀あるは、實に彼が偉大なる點にあらずや。今朝陽浴鶴圖と題するは、彼自らかく命名したる手簡の存するによりてなり。

文晁よく諸流を渾融し一派を開拓したりしかは、世に南北合派の名稱を附するもの多し。これまた一見識にして、本圖の如きは當時世に南宗畫と呼ばれたる一派の筆致の妙を發揮し、賦彩も亦濃麗莊重にして、南蘋一流の法によれる所多きものといふべし。然も日常筆にする所住々豪放磊落の筆致、墨痕淋漓たる北宗畫的の様式を以てするこそ少なからざれば、南北合派の名稱ある偶然にあらずるなり。是れ文晁の修養廣豁にして且つ深潤なるを證すべく、畫界の奇傑すら猶決して易々として、覇者たるの榮譽を擅にしたるものにあらざるを知るべし。















姜 隱 筆 西 王 母 圖

絹本 竪五尺四寸 横二尺九寸

Painting of Seibo. (A Chinese Tradition.)

By Kiomin. (16 Century.)

東京美術學校藏

人物畫は明代に至りて著しき變化をなし、宋元時代の道釋畫は元朝以來の文化下向によりて、流麗細巧なる風俗人物畫となり、かの有名なる仇英出づるに及び、明代人物畫の師範を仰がれ、この流麗當時の畫苑を風靡するに至れり。本圖の如きは實にこの傾向の下に現はれたるものといふべく、以て明代風俗畫の趨勢を知るに足るべし。

本圖は古來有名なる畫幅にして、或は姜道隱の筆を傳へられしことあり、雖、彼は五代の人、其の筆者にあらざることは明かにして、姜隱の款識あるに關らず誤傳せるもの如し。姜隱字は周佐、山東黃縣の人、畫史彙傳には、人物士女花果を善くし、細潤古法を得、構景蕭疎、寄情凝遠、時に能品を稱す云へり。此圖は穆王西王母に謁する所にして、桃花紅艷を競ひ、綠竹佳石其の所を得、清眸豐頰、美容を擅にして、神采風丰、人間界裡のものにあらざるを思はしむ、意趣超凡、畫品亦高雅、洵に明代名家の趣致を鑑賞するに足るべく、雄渾秀拔なりし道釋畫と對比せば、其の變化の顯著なるものあると共に、また別個の畫趣に誘致せらるゝものあるべし。



老六郎師の術藝に驚きたるものあるべし。

黄瀬の人、高史、葉軒、二お人、時士、又、芥果、を、善くし、時、開、古、志、を、掛、勘、景、藏、菊、客、計、張、軒、二、消、品、を、釋、を、さ、  
芥、二、あ、さ、さ、る、こ、し、お、即、や、こ、し、了、姜、翹、の、燕、羅、あ、る、二、關、を、賭、射、さ、る、と、し、の、味、了、姜、翹、宇、お、風、井、山、東、  
不、圖、お、吉、を、け、さ、る、と、し、お、即、や、こ、し、了、姜、翹、の、燕、羅、あ、る、二、關、を、賭、射、さ、る、と、し、の、味、了、姜、翹、宇、お、風、井、山、東、  
了、即、升、風、俗、術、の、藝、を、映、る、二、呈、る、べし。

當、油、の、端、端、を、風、俗、術、の、藝、を、映、る、二、呈、る、べし。  
時、士、の、風、俗、人、時、士、を、さ、る、と、し、の、味、了、姜、翹、の、燕、羅、あ、る、二、關、を、賭、射、さ、る、と、し、の、味、了、姜、翹、宇、お、風、井、山、東、  
入、面、端、端、を、風、俗、術、の、藝、を、映、る、二、呈、る、べし。

東京美術学校藏

By Kiou. (16 Century.)

Painting of Seicho. (A Chinese Tradition.)

日本美術学校藏

風俗人時士











土佐光起筆 貝 畫 圖

絹本 竪八寸二分 横一尺二寸

Painting of the Shell-Fishes.

By Mitsuoki Tosa. (1617-1691.)

東京美術學校藏

抑日本繪畫の古來よりの大流を原ぬるに、北宗南宗の如き、中世に於ける支那系統の畫派にはあらず、假へ其の源を上世の韓畫、唐畫に發す。雖、全く日本化して、我國獨特の様式をなしたる大和繪をこそ擧ぐべけれ。藤原鎌倉時代は實に大和繪の最盛期なりしが、足利の世に、宋元の畫風榮ゆるに及びて、在來の純日本の様式は新興の漢畫派に壓倒せられぬ。桃山時代より、江戸時代の初に、また日本趣味の復興を見、存續殆ど測り知り難かりし土佐派は、茲に一大發展を遂ぐるに至れり。これ實に光起の努力によれるなり。

光起は元和三年に生れ、寛永中二十二歳にして父を喪ひ、祖父光吉の門人戸田光純に畫道を學び、畫名漸く高く、從五位下左近衛將監に叙せられ、また繪所預となり、一旦絶えたりし土佐の繪所は再興せらるゝの盛運を見、後剃髮して常昭と稱し、法眼に叙せられ、元祿四年歿せり、時に年七十五。

惟ふに光起は土佐家再興の傑物なり。雖、漢畫派の影響を蒙るこゝ甚大にして、藤原鎌倉時代の大和繪とは、流風相同じからず、頗る典型的の弊に陥りし所あるも、寫實に精にして、花卉翎毛より、魚鱗蟲介の微に至るまで、一一窮盡せざるなし。貝畫圖の如きは、尺方の小幀中によく精緻巧麗の筆を以て、實體描寫の妙を發揮したるものといふべく、また彼が特技として稱揚するに足るべし。









土佐海産物









沈 南 蘋 筆 花 鳥 圖

絹本 縦三尺 横一尺三寸八分

Painting of Flowers and Birds. By Chin Nanpin.  
(18th Century.)

青木定謙君藏

本邦の近世畫界に於ける精緻巧妙なる寫生畫は、顯著なる發展を遂げ、幾多の流風を生じたるも、其の先は近く沈南蘋の畫風に負ふ所頗る大なるは、吾人の特に興趣を感ずる所なり。

抑清朝の繪畫は、花鳥畫に於て最も特殊なる發達をなし、黃氏體鉤染の古法に依れるもの、或は勾花點葉體を以て、前代の風格を繼承するもの、成は純沒骨體とも稱すべき新樣式等ありて、南蘋は實に勾花點葉體を以て、よく寫生の眞諦を得、また清新なる沒骨體に精緻秀麗なる特色を發揮せり。本圖の如きは、即ち沒骨法に依れるものにして、款識に徐崇嗣の筆を祖述せる旨を明記せり。徐崇嗣は北宋徐熙の孫、畫院の外にありて、沒骨寫生の畫法を創始し、加之祖父の輕淡野逸の手法を傳へて、當時院體の畫式を大成したる黃氏一派に對峙せり。崇嗣、連枝花禽に長じ、果實の地に墜つる様を畫きて、具に形似を得たりといふ。以て其の寫實に長ぜるを知るべし、されば後世沒骨法を學ぶもの、多く徐崇嗣の法を師さするに至れり。

今沈南蘋の畫風を見るに、古の徐氏黃氏兩體及び林良等の寫意派を渾然融合したる勾花點葉體を根柢とし、寫生に一新生面を開きたるものにして、また巧緻精麗の畫風を以て、徐氏體變化の妙を極めたる沒骨體に筆を染めたるものといふべし。同じく沒骨法といふも雖も北宋時代は、描線皆無といふにあらずして、細勾の描線賦彩の爲めに負け、僅に草苔の類に、線畫なきに過ぎず、故に黃氏體が勾勒填彩を専らさせるに比して、沒骨の名を得たるものにして、未だ清朝の新樣式に於けるが如き純沒骨には至らざるのみ。

本圖は即ち南蘋が宋人の法に倣ふて沒骨法を試みたるものにして、用筆秀逸設色清麗よく寫生の能事を盡せるものといふべし。

かくる清新なる畫法の一部我が國に移植せらるゝや、これまで形式的畫法に倦みたる畫界は翕然としてこの法を學ぶに至れり。熊斐宋紫石等以下の所謂長崎派は云ふに及ばず、圓山應舉の寫生派亦これに負ふ所頗る多く、華山椿山の徒亦この法によりて、直接間接に我が畫界に貢獻したるこそ甚だ大なり。南蘋の遺せる効果亦偉ならず

とせんや。







南蘋沈銓寫徐崇嗣筆









渡邊華山筆 鷹見泉石像

絹本 竪三尺八寸 横一尺九寸

Portrait of Senseki Takami. By Kwazan Watanabe.  
(1793—1841)

鷹見久太郎君藏

華山名は定靜、字は子安また伯登といふ。通稱登、號は華山、晩年には隨安居士といひ、別に寓繪堂・全樂堂・昨非居士・金墩居等の號あり、其の家世々三河の田原侯に仕へ、華山は江戸の藩邸に生る。初め儒者たらんを欲し、大に奮勵せしが、父は二十年來の病に悩み、弟妹七人は華山これを教養せざるべからず。家計窮乏の態名狀すべからず。是に於て聊かたりとも、生計の餘裕を得んとして、丹青の道に入り、谷文晁の高足金子金陵に學び、その後また文晁に就て學べり。かの傲慢なる文晁すら、華山を推重して、己の門下生に教へて其の指導を請ふべしと云へるに見るも、彼が天稟の畫才の非凡なるものありしを知るべし。而して華山は益々畫技の研鑽を積み、明清の諸名家より宋元の名蹟に至るまで悉く執りて己が畫囊を肥せり。山水花鳥人物行く所として可ならざるなし。然も猶他に傑出して、餘人の敢て拮抗し能はざるものあり。肖像畫に於て鷹見泉石の畫像は實に代表的最大傑作品なり。

泉石は十郎左衛門と稱し、古河土井侯の家老にして和蘭學に通ず。田原藩にも鷹見氏あり、も縁戚の關係にあり、是を以て華山は泉石に就て和蘭學を修むるに至りしなりといふ。即ちこの圖は華山が師の像を寫せしものにして、落筆謹嚴なる所以を知るべく、泉石五十三歳華山正に四十五、技圓熟の妙境に入り入神の靈腕を揮へるなり。

今この畫に就て注目すべきは、其の描線の含蓄に富みて、無用の線條を用ひず、一點一劃よく表現の意味に適應せることにして、設色は淡泊瀟灑よく卑俗の弊を避けて、巧に西洋畫法を參酌し陰影を施せるが如き、何れも華山の進取的な描法に敬服せざるを得ざるべし。實に近世の日本畫に於ては肖像畫を作るに短にして、未だよく傳神寫貌の能事を盡したるものなかりしに、唯華山ありてこの技に秀でたり。惟ふに肖像畫に就て近世日本畫の爲めに萬丈の氣を吐くものといふべし。



もく 軒窓の猶事を盡したるものなかりしに、御華山ありてこの姓を承りたり。

[illegible]

のうへに、名を「源」たる源氏を置かば、泉江武生は遠く山奥の四十五姓圓庵の惣領一人の入師の義國といひ、是より山下にお泉江の源丁味蘭學を封ひるに至りしなりと傳ふ。明さこの圖お華山は碩の翁を慕せし泉江村十津木曲門を創し、古語に其翁の家を「つじ」味蘭學の館と白雲菴と云、翌年丑あゝとを縁娘の關羽の外方御覽の贈用品なり。

[illegible]

(1763-1841)

Portrait of Senzaki Takami. By Kawasari Matsunosuke.

歸才 翠 三 只 八 七 冊 一 只 式 七

新  
豐  
年  
出  
戶  
望  
泉  
下  
樂

洲泉下鄉











狩野探幽筆 孔子像

絹本 縦三尺七寸五分 横一尺七寸

Portrait of Confucius. By Tanyu Kano.  
(1602—1674.)

子爵 大河内正敏君藏

近代に於て大和繪と漢畫との融和を圖り、漢畫を日本的に醇化し、國民的性情を描出して、其の典型を後昆に垂れしものを、狩野探幽とす。探幽の盛時は即ち江戸文明の成立に向はんとする時に於て、桃山時代より益々進展せる純日本的文風と、漢學興隆に伴へる支那文明とは混沌として錯雜したりき。思想上にも、一般社會の上にも、この二者の排離、惺融の争は免れざりき。この時に當り探幽は卓絶せる識見を以て、夙く大和繪と漢畫とに探長補短を行ひ、惺然として其の融合を遂けしは、實に近世繪畫史上に一期を劃せるものにして、探幽の偉績は陸離として光彩を放てり。本圖の如きは、この文明推移の上、に畫かれたるものといふべく、新興の儒教は舊來の佛敎に代りて、世道の師表となりしにより、直にこれを繪畫に表現したるものとも見らるべし。猶樣式に就きて論ずれば、描線の用法、賦彩の特技、共に東山時代に盛んなりし水墨淡彩の畫風と、桃山時代の金碧濃彩の特长とを惺融したるものなるを知るべし。即ちこの一圖に依るも探幽獨特の妙技の一半を窺知するを得ん。然れども彼が殘しゝ典型は、子孫に拘束を與へて、一步もこの圓外に脱出するを得ざらしめ、遂に萎微振はざるに至りしは、社會制度の然らしめし所多きに居る。雖、また探幽の爲めに惜まざるべからざる所なり。本圖は大河内子爵家の珍藏せらるるものにして、子の祖隆綱は丹青の道を樂み、探幽に就きて彩筆を揮はれたりといふ。故に同家には探幽の妙蹟少なからず、孔子像の如きは、相貌高雅、姿勢端嚴にして、描線賦彩共に謹嚴なる用法を以てし、孔子其の人の風格を想見するを得べし。



用盡多以下ノ其の人の風俗多悲見をるを昏ハ。

[illegible]

千霜大醉內五婦作

1605

*[Faint handwritten notes or bleed-through from the reverse side of the page.]*

日本  
三  
五  
一

卷之四





探出法機存原寺信義  
（五）







久隅守景筆 唐美人圖

紙本 竪三尺六寸五分 幅一尺二寸

Painting of Chinese Beauty. By Morikage Kuzumi.  
(17th Century.)

下條正雄君藏

守景姓は久隅(或は久須美)通稱を半兵衛といひ、一陳翁、無礙齋、無下齋、或は棒印と號し、畫を探幽、守信に學び、稀世の才を有し、鉦々の譽ありて、門人の高足所謂四天王中の隨一と稱すべきなり。「畫乘要略」に、守景を稱揚して、探幽に學びて其の意を會得し、尤山水人物に長じ、超邁雅健、曲に其の妙を盡くし、雪舟と伯仲し、探幽門下其の右に出づる者なしと云へるは、敢て溢美にあらずるなり。實に守景は尋常一様の繪師にあらずして、名利に走り筆を妄りにしたるものにあらず、清貧に安んじ、志高潔にして、意氣を重んじ、抱負を持して、敢て下らざるの人なりしなり。されば彼はよく自己の性情を遺憾なく發露し、毫も規法に拘束せらるゝ所なし。これ等の特徴を具有したりし彼は、如何なる待遇を受けしや。抑慶長元和の戰塵、長へに收り、世は封建の政治に、泰平の春を樂み、漸く世襲の弊を生ずるに至りては、師の典型をこれ墨守して、敢て一步も其の圖外に脱出せざるを以て、弟子の木分と思考するに至れり。如何ぞ守景の如く洒落磊落にして、畫技の力量優れ、敢て師の先縱を追はざるもの、よくその寵を専らにするを得べけんや。守景の室は探幽の外姪(神足常庵女)なりしに、關らず、遂に破門の厄に遭へり。これより如州金澤に赴き、加賀侯に仕へ、寵用せられたり。歿年は詳かならざれども、七十年頃の行年を署したる畫蹟、加州に傳はるもの少なからずといへば、頗る長壽したりしを知るべし。今本圖を見るに、唐美人を畫けるに關らず、能く日本の趣味を表はし得たるは、守景の特色として、贊稱の値あるべし。探幽固より和漢の融合を遂けしと雖、守景も亦この點に於て師に譲るものにあらず。若し唐美人以外のものに就きて見れば、この特徴は更に明瞭なるものあり。吾人は守景が常に畫技に秀で、匠氣なく氣格に富めるを賞する外に、師の典型に従ふを潔とせず、日本の自覺を以て、畫道に光明を認めつゝ、進展せるを多とせざるべからざるなり。



卷之六

丁未年

1. The first part of the document is a list of references. The references are listed in a vertical column on the left side of the page. The references are as follows:

- 1. The first part of the document is a list of references. The references are listed in a vertical column on the left side of the page. The references are as follows:

飛 本 朝 一 萬 六 千 三 百 三 十 一 人

八  
四  
十  
五  
年  
限  
式  
人  
編





八百六十一









紅蓮白鷺圖

絹本 竪三尺九寸 横二尺一寸六分

Painting of The Red Lotus-Flower and Snowy Heron.  
(14th Century.)

子爵 末松謙澄君藏

繪畫が宗教の羈絆を脱して、鑑賞の爲めに作らるゝに至れるは、これ丹青界の大なる進歩にして、支那にありては、早く宋代に於て花鳥畫が山水と共に、宗教より獨立して一大發展を見、遙かに唐代を凌駕せり。而して黃氏體徐氏體の二様を生じ、益々發達せしが、共に精緻巧妙なる寫生に基き、花卉翎毛皆天真を得、賦彩何れも濃麗にして、よく花禽の眞を得たり。この流れを汲める花鳥畫は、我國に輸入せられたるもの少なからずして、猶往々現存せるものを見る。本圖の如きは世に宋畫として傳へらるゝものにして、頗る古色蒼然たるものあれど、熟視すれば白蓮紅蓮の細密精緻なる寫生に出づるものなるこそを看取し得べく、支那に於ける花鳥畫の古き様式をも窺ふこそを得べし、構圖もよく整ひ紅蓮に白鷺を配して、賦彩の上に興趣深き色調を收めたりしはこの畫の優れたる所以なりとす。



[illegible]

卷之十

(14th Century.)

Painting of The Red Lotus-Flower and Snowy Heron.

將本選三只六廿蘇二只廿六分

珠璣白雲圖

珠璣白雲圖











山本梅逸筆 四季草花圖

絹本 竪三尺五寸五分 横一尺二寸七分

Painting of Flowers of the Four Seasons. By Baiyetsu Yamamoto.  
(1783—1856)

永坂石埭 君藏

梅逸名は親亮、字は明卿、幼名を卯年吉といふ。天明三卯年十月二十日生る。父を友右衛門といひ、尾張名古屋天道町に住みて彫刻師たり。卯年吉幼より父の家業を見習ひ、花卉禽獸の形を書き、丹青の道を嗜みしかば、遂に其の道に志し、初め山田宮常に學び、又山本蘭亭に就き、後張月樵に従ひ、春園と號し、元明清諸家の畫法を學び、其の遺蹟を臨摹學習して、南宗の筆格墨法を悟り、又王元章の墨梅を見て、これに私淑し、號を梅佚と改むるに至れり、時に二十二歳なりしといふ。中年以後、佚字を改めて逸と書せり。天道外史、玉禪、玉禪居士、梅華主人、梅華逸人等と號し、其の居を友竹艸店、白梅居、樂是幽居等とも稱せり。而して梅逸の技をして益々進境に導きしものは、芥子園畫傳なり。當時該書の舶來日尙淺かりしかば、價貴くして貧生の手に入るべくもあらざりしが、熱烈なる研究心は、其のまゝ止むべきにあらず。書肆に請ひ、借り受けて、一夜の内に臨摹を終り、それより日夕坐右に備へて研鑽怠らざりしといふ。これより技頓に進み、名聲籍甚たるに至れり。加州侯の金澤御殿新築成りて江戸より、谷文晁を招き寄せらる。梅逸時に京都に在り、亦出で、殿内の襖全部を描かしめられ、益々其の聲價を高めたり。後嘉永五年梅逸歳七十、名古屋に歸住し、猶筆硯に従事せり。遠近傳聞し、揮毫を請ふもの頗る多し、されば彼が畫名やがて藩主徳川侯に聞えて、御繪師の格に進められ、御用人支配となりて、帶刀を許され、拜謁の榮に浴し、士分に取り立てられたり。抑彼が有せし卓拔なる技倆を以てしては、正にかゝる恩典に浴するを至當なりとす。雖、其の期を早めしものは、實に本圖に負ふ所大なりと傳へらる。即ち彼はこの雙幅を藩侯に奉呈して、知遇を得たるなりとぞ。これより後は屢召されて、席上揮毫をなし、又寶物の描寫を許され、或は城中の杉戸衝立等をも畫きしといふ。

梅逸は構想奔溢、筆端縱横に飛動し、毫も滯滞の痕なく、設色潑墨共に靈妙を極めたり。當時大雅蕪村の末流、疎笨磊落の筆を弄し、以て氣韻高雅を得たりとするに對し、實相を主として、これを寫意に轉化せるは、また彼が識見の偉なるを見るべし。かくて安政三年正月二日、梅逸は己が死期を豫知せしものか、遽に知己を招き、身に白衣を纏ひて、心經を讀みけるが、今日はこの世の別をなすといひ終りて、溘然冥目せりといふ。行年七十有四、名古屋伊勢山町洞仙寺に葬る。















狩野常信筆 武者 圖

絹本 竪四尺五寸 横一尺七寸

Painting of a Warrior. By Tsunenobu Kano.  
(1636-1713)

子爵 末松謙澄君藏

狩野派は近世に於ける我が繪畫界の最大流派にして、徳川三百年の治世に幕府の保護に依りて畫界の覇者となれり。探幽は即ち狩野家中興の偉才なり。雖、この後に出で更にその基礎を確固たらしめしものは即ち常信なり。常信は即ち探幽の甥なり。

常信は通稱右近剃髮して中務卿法印に叙せられ養朴と號す。また古川叟、耕寛齋、青白齋、紫薇翁、寒雲子、朴齋、弁毫軒、潛屋等の諸號あり。寛永十三年京都に生る。父は探幽の弟尙信にして通稱主馬、自適齋と號し、探幽に次ける名手として世に喧傳せられ、疎畫を好んで墨色淋漓雅趣横溢するものありしが、慶安年中五十歳に満たずして死したりしかば、これまで父の教を受けたる常信は、更に伯父探幽に學んで著しき進境を示し、其の技倆殆ど探幽に譲らず。家祖正信、元信等の畫蹟を究め、雪舟の長をそり、更に深く宋元畫の妙所を窺ひ、漢畫派の奥底を開き、且つ舊來の純日本畫にも着目し、大和繪に深き興趣を感じて研鑽勉めたりしかば、愈優麗なる家風を生ぜり。探幽の雄勁秀拔なるに對して常信の穩雅着實なるは、彼が修養の過程に緣因するこゝ少なからざるべし。本圖の如きは實に常信の特殊の方面、即ち大和繪の修養の凡ならざるを示せるものにして、圖様は敢て異にするに足らず。雖、其の手法の精緻巧妙なるに至りては、また賞揚するに足るべく、正に漢畫と大和繪との渾和を圖りたるものといふべし。

常信の世既に天下泰平に狎れ世襲相犯さず、門閥階級の別明かにして、才藝あるものもよく天稟の力を發揮するこゝ能はず、徒らに先蹤を追ひ、形式を尊重する世なりければ、常信また探幽の法を守りて其の規矩の外に逸脫するこゝ能はざりし憾なきにあらざるも、未だ狩野家の精髓を失はず、常信の特色を發揮し縱横の才を以てし、後の狩野の諸家よくこれと並馳するに足るものなし。

常信は實に狩野の重鎮にして、狩野家繁榮の基をなすに與つて大なる力あり。子孫木挽町の狩野と稱す。常信また文學に長し、徳川光圀の知遇を得、中院通茂と交り和歌に秀でたり。正徳三年歿す。享年七十八。



満家よりこれを延焼するに及ぶものなり。

を猶おちりし猶ふをいふとて、未だ後理家の諸藩を夫れを常計のむくを資料し、端脚のすを以てし、終の後理の

の丁おえは賞賜するに及ぶへく、且つ常計を大味餅との常計を備へるものとすべし。

大味餅の常計の具なるをふべきものなり、丁、圖計を常計とす、其の具の具の諸藩に及ぶるに及

常計の諸藩を實なるに、終の常計の諸藩に及ぶることなるべし、且つ木圖の具を、常計の常計の具

終日、大味餅の常計を興計を興計し、和漢の具

終日、大味餅の常計を興計を興計し、和漢の具

終日、大味餅の常計を興計を興計し、和漢の具

終日、大味餅の常計を興計を興計し、和漢の具

(1838-1813)  
Painting of a Warrior By Tsuneharu Kano

終日、大味餅の常計を興計を興計し、和漢の具











渡邊小華筆 牡丹 圖

絹本 竪四尺 横一尺三寸

Painting of Flowers of the Tree-Peony. By Shokwa Watanabe.  
(1835—1887)

山本安三郎君藏

小華名は諧、字は韶卿、渡邊華山の二男なり。天保六年に生る。其の時華山年正に四十三、華山の自盡するや、小華僅に七歳なりしかば、椿椿山これを指導し訓育甚だ努む。實に小華は椿山の力によりて畫技の堂奥に入れり。

椿山は華山門下の秀才なり、而して憚南田、張秋谷に私淑し、また好んで王忘庵の風を學び、沒骨法を用ひ、淡雅鮮麗にして、渲染明艷一點の霸氣を存せず、華山の如き雄拔の氣に缺くる所あるも、優雅溫麗の趣に富み、高遠なる韻致を求め、近世南宗の泰斗なり。小華はよく其の畫風を承く。

本圖は風前の牡丹を畫きて、よく其の姿態を寫し、且つ風韻を失はず、翻々として風に吹かるゝの狀、賞揚するに足るべく、其の沒骨法の如き椿山と髣髴たるものあり。小華の畫技に至りては敢て侮り難きなり。

現時華山の眞蹟として傳はれるものに、往々小華の畫けるものを混入せり。或は偽作を敢てせり、傳ふるものあるも、多くは小華の款識を削りて華山の款と變へたるなりといふ。往々一見識別に苦しむものなきにあらず、以て其の技倆の一端を窺ふに足るべし。小華の世にあるや、時正に維新の變革に會ひ頗る窮乏を極めたりといふ、明治二十年十二月歿す、年五十三。



小華の焦を以て其の封附の一畝を譲ふに与るべし。小華の世にあるや、初め一畝を以て焦を  
 譲ふと云ふは、冬にお小華の焦端を削りて小華山の焦を變へたるなりとす。井々一只輪眼に苦じひ  
 原山に焦を譲ふに丁軒お訴ふるもの、井々小華の請ひふるものと、斯人甘く宛お慰むを煩う丁軒  
 とす。

[illegible]

Painting of Flowers of the Tree-Peony. By Shokwa Watanabe

日本國史

遊學小冊



千金一擲 關家嘉唐  
代風情事可珍 志兒方村  
年少士家 西屏 乃新  
居 小華 史人 著 於









田崎草雲筆 浪搖岳陽樓圖

絹本 横一尺八寸七分 竪四尺三寸六分

Landscape. By Soun Tazaki. (1815-1898).

羽生順吉君藏

田崎草雲名は芸諱は明義通稱を恒太郎といひ、初め梅溪と號し後字草雲を以て畫名とす。白石子、後樂生、三白翁、硯田農夫、蓮岱山人、知不知齋、顧自棄齋、半甘生、玄圃生、鐵面生等の諸號あり。畫屋は初め梅溪畫屋と榜し、又七里香草堂と匾し、更に白石山房と稱す。もと下野足利藩の卒族なり、父恒藏は金井烏洲に學び、草雲も亦烏洲に従ふ。後加藤梅翁の家僕となりて畫技を勵み、依て梅溪と稱し、また谷文晁の門をも叩き、後専ら春木南溟に師事せり。然れども猶これを以て足れりせず、元明清諸大家の筆蹟に學びて遂に其の特技を大成するに至れり。仇十洲の回錦圖卷、錢涪洲の人物畫卷、劉松年の畫錦堂圖卷、盛茂燁の山水圖等は特に草雲に刺撃を與へて啓發せしめたる處多しと謂ふ。

草雲は尋常丹青の徒にあらず。天資剛厲にして、王事に盡すの念篤く、明治維新の大業成らんとするの日、佐幕の論盛んなるの間に立ちて、勤王の士を率ゐ、誠心隊の名は著しく、殊に剛勇と奇智とを以て能く兵馬倥傯の間に處したるは、特に歎賞に値する處なり。今上陛下深く其功を思召され、大正四年十一月十日從五位を追贈せられたり。草雲の生涯は實に崎嶇羊腸の峻路たりき。幼にして繼母の兒と相容れずして家を去るの不幸に遭ひ、流浪艱難具に世故の辛苦を嘗め、長じて娶るに及ぶや、其の婦貞良にして勉めて倦まず、幸に後顧の憂なからしめたり。雖も不羈狷介なる草雲は、其の彩筆を俗衆の需によつて弄するこゝなきを以て、米鹽の料常に乏し。然かも氏の畫名未だ高からざるに、二十有一年の久しき苦勞を共にしたる糟糠の妻は、難症のために夫に先立て逝き、尙ほ後年に至りては、其の嗣格太郎は、婦と共に刃に伏するの悲運に會せり。晩年畫名漸く高く、聲譽世に高きに至りしと雖も、氏が生涯を追想すれば感慨禁じ能はざるものあり。草雲此の間に處して尙ほ毅然として其の守る處を失はず、性來酒を嗜みて悠々たる天地を壺中に求めり。白石山房の閑棲、僅かに氏が前半生の峻路を忘るゝに足れり。氏が作品の淡雅にして、然かも力あるは、氏が境遇と性格との產物として當然なりとす。

本圖は草雲の作品中、精描の部類に屬すべきものにして、濃彩を施し、樹石樓閣波浪飛禽皆寫實に基き、然かも其の間に筆致の味ふべきあり。勇健の態以て氏の特色を見るに足れり。今款識によつて明治六癸酉の歲草雲正に五十九歳の筆なるを知る。當時は畫運最も衰頽せるの時なり。然も悠々としてかゝる丹青の巧を盡せるは實に世を超絶したる逸士草雲の如きにあらずれば焉んぞよく斯くの如くなるを得んや。















遊 鯉 瞰 下 圖

紙本 竪一尺七分 横一尺五寸五分

A Genre-Picture of Early Tokugawa Period. Artist, unknown.  
(17th Century.)

子爵末松謙澄君藏

徳川初期に於ける風俗畫の今日に遺存せるもの尠少にあらず、本集亦其の蒐集に努めしが、本圖の如きも逸すべからざる名品に屬す。もよより其の筆者を明かにするこゝ能はず。雖も、惟ふに土佐系に出でたるさる名手の筆に成りしこゝは疑なかるべく、然かも因習的古典的な土佐流に満足せるものにあらずして、進取の氣象に富み、現代的風俗を畫くに適應せる手法を以てせんが爲め、種々なる畫風を攝取せる所あるを見ん。徳川初期は國運隆昌にして活躍の時代なり、畫界も亦舊來の常套を脱して千紫萬紅其の美を競へるの時なり。現代的風俗を題材として立てる浮世繪派は實に丹青界の一角に確乎として其の地歩を占めたり。

そも浮世繪といへば其の精華は版畫にして肉筆は論ずるに足らず。雖も、これ中期以後の作に就いていへるのみ、其の初期のものに至りては、賞鑒者の推重措く能はざるもの少なからず。これ未だ典型的の惡弊に陥らず、作者が自由の意思を以て、題材を撰擇し表現の方法を考慮したるが爲めに、生氣畫面に溢れ、畫趣自ら豊かなるに至りしなり。他派の畫家が典型に束縛せられて、其の圓外に一步も逸脱するこゝ能はざりしこゝは同日の談にあらず。本圖の如き若き男女の鯉魚を見て嬉戲するの狀、想見すべきものあり。構圖設色共に穩雅にして、優裕迫らざるの畫態、よく徳川初期の風格を示し、初期の浮世繪として特に賞鑒に値するものなり。



ハモミの魚は湖圖麁魚共ニ齋罷コジテ、蟹類魚をてゐるの畫越えノ瀬川時限の風斜を示シ、時限の濱川  
するこを鮎おちりじとお同日の菰コもさ本圖の賊を暮を便すの鹽魚を見テ齋難するの想、懸見む  
而ニ齋休畫懸自ら豐ゆなるコ至リナリ。掛紙の蕎麥依典堅コ束縛サレタリ、其の圖代コ一妻と戲彈  
曲の惡樂コ酬さを、非善な自由の意思多ク以テ、隠林を對觀シ走馬の衣衣を著敷コたる依盤也、コ主餘滿  
アツへるの各、其の時限のものに至リテお賞鑒善の鮮重紺ノ鮎おちるもの也な依さを。コ休木訖典學  
さゝ稻世餘ヲ付ヘお其の諫華お頌藹コジテ肉韮お歸するコ只さをシ握ちよ、コ休中限以翁の計ニ據  
眞ニ龍年コジテ其の蝦蟇を占めたり。

子爵米俸鼎新其

Arctic region, before the onset of the 1990s.

五  
甲  
細  
子  
圖











板谷桂意筆 香爐峰圖

絹本 竪四尺一寸四分 横一尺七寸四分

A Lady of Fujiwara Period. By Kei Itaya.  
(19th Century.)

清野長太郎君藏

狩野家が江戸幕府の専屬繪師たるに對抗して、土佐家は京洛の地に朝家の御用を勤め、其の技倆に於ては著しく觀るべきもの無かりし。雖も當時の畫界に二大勢力を成して、名門の聲譽を保ち來れり。然るに土佐の家分れて江戸に移り、狩野家と並びて將軍家に仕ふるに至り、勢望本家を凌ぐの右様を呈せり。之れを住吉家と稱せり。安永天明の頃に至りて住吉派より別に板谷、栗田口の二家を出せり。板谷家の祖は住吉具慶の孫廣守の門人慶舟廣當なり。板谷派にては桂意、桂舟の通號を毎代交互に用ひたるが、本圖の筆者たる桂意は、第二代の廣長なり。廣長は天明二年十月御前に於て畫を仰せ付られ、同五年十月朔、御目見、寛政八年十二月通號慶意を桂意と改め、文化四年五月十日西丸奥御用仰付られたりといふ。本圖は清女が香爐峰の雪の奇智を畫けるものにして、古法を守りたる謹嚴なる筆致自から觀るべきものあり。



のる本圖が青竹の香墨軸の雲の香骨を畫けるものにして、古きをとりては蕭々たる筆趣  
景、遠近八平十二尺、紙に題意を附意し、芝と文出陣至十五日酉戌庚辰無病作とある。  
萬年二斗の題詞あり。題詞に入則二年十月晦前日外丁書を附せ侍る。其同五年十一月四日  
我直當志より通谷通りて材料意、林良の風鑑を附け交置し、里のさへ本圖の卒管なる并意  
了。且吉新より紙に列谷、粟田口の二案を出せり。通谷案の鹿は、且吉具製の筆、源守の門人、郷  
ふるこに至る。豐隆木家も素々の材料を呈する。此れは、且吉案と辨せられ、安永年間、鹿口字の  
音門の懸装束、附くる來びり然る。こ土計の案、元禄丁丑月、日録に發裡案を並置す。雜軍案、且吉  
の封附に依りてお著しく購ふべきもの無かりしを觀るも、當時の畫果に二大變代を歎じ、丁  
丑、我室は、且吉、豊隆の事、細絲前後より機詞して、土計案、和京高の里に歸案の曉目、奉時より、其

諸裡社人源書

(10th Century.)

A Tazû of Fujikawa Period. By Kei Itada

謝 本 學 國 八 一 七 四 食 辦 一 八 二 七 四 食

遜谷林簾字香誠子忠圖

香  
誠  
斗  
圖











露殿物語繪卷

紙本 一尺一寸五分

横全長 十八丈五尺 (三卷)

A Scene from the Tsuyudono Monogatari. Artist Unknown. (17th Century.)

楠林安三郎君藏

浮世繪の畫卷として世に知られたるもの少なからざれども、此の畫卷は未だ會て世に紹介されたることなし。畫中の風俗は有名な彦根屏風に似たる點多く、蓋し徳川初期に屬すべきものにして、寛永より僅かに下れる時代の作なるべし。此の時代に在りては、一貫せし物語を斯くの如くに畫卷としたる作例乏しければ、特に珍重すべく、畫も亦優れたる點少なからず。詞書及び畫の筆者は共に詳かならざれども、惟ふに畫は、京都に在住せし京狩野派に屬する畫家の筆に成りしものならん。何となれば全卷を通覽するに、江戸の風俗を畫ける部分の簡粗なるに反し、京都の風景例へば島原、四條河原の如きは極めて寫實的に精描され居るが故なり。畫は露殿と稱ぶ江戸の一貴公子の閑歴を、三卷に亘り連續して描けるものにして、繪は通して二十八段あり。

露殿は幼時より寺院に托されて生長せしが、十八九歳の頃、或日生家を訪れる折、櫻花の散るを見て世事の常ならざるを觀じ、道念禁め難きを以て、父母に懇願して遂に出家の許を得たり。然るに折柄所用の途次、淺草田圃を過ぎて路傍に憩へる時、其の前を過ぎ行く一挺の女乗物あり。折しも風に吹捲かれし簾を洩るゝ美貌を見るや、露殿は忽ち菩提の志をも忘れ、其の女乗物に随ひ行きしが、遂に吉原の廓内に入り、人に就いて問へば、是れ廓中第一の遊君なりといふ。露殿は直に之れに會はんことを欲すれども、取合ふものなし。乃ち其の婢女を誘ひて家に歸り、小袖財物などを與へて其の歡心を求め、然る後、之れに玉章を托して彼の遊君に贈らしめたり。婢は具に事情を語りて其玉章を渡せしが、遊君も其の意を諾して返書を與へたり。露殿の喜び甚しく、直に到りて相會せしが、相思の情切なるものあり。足繁く通へる内、或る時女は、悲惨なる身の經歷を露殿に語りぬ。即ち父は元和の役に大阪方に在りて難波口の戦に死し、後母に作れて中國筋に在りしが、母の死後は具に艱難を嘗め、遂に誘拐の厄に遭ひて、此の廓に身を沈めたるなり。尙ほ上方にある父母の墳墓に詣でたしこの意をも告げたり。露殿は身の代償ひて作ふの資力もなければ、相謀りて遁走せり。然るに途中武藏野原にて追手のために捕はれ、共に江戸に引戻されて、露殿は譴責に遇ひ、女は再び廓の籠鳥となりぬ。露殿憂悶の日を重ねしが、或る友來りて、露殿の身の上は知る由もなく、世の風評のまゝを告げて、さて女は座敷牢に入れられしが、潜かに逃れて隅田川に投身せり。こゝいひ、又上方へ走れりとも噂する旨を告げぬ。露殿の驚き一方ならず、女は恐くは上方へ赴けるならんことを推察し、乃ち上方見物に假託し、父母の許を得て京都に至れり。一旅舎に宿り、案内者を求めて東山邊の名所を訪れ、途次洛西島原の遊廓に入りぬ。時しも夕暮の賑はしさ、往來ふ遊君の中に殊に優れし一美女の玉章讀む姿なき、嘗て契深かりし彼の吉原の遊女に似通へる點著く、乃ち傍に問へば、當時廓内第一の美人なり。露殿舊情追憶の念に迫り、此の女と會して戀情極めて切、屢々此の廓に通ふに至りぬ。然るに彼の吉原の遊君も夙に京都に在り、露殿が島原に豪遊の噂を聞き、來り會して其の無情を責む。茲に於て露殿前非を悔ひ、改悛懺謝して出家することとなり、遊君亦發心して尼となるに至る。

本圖は島原にて露殿が廓中第一の稱ある遊君を見そむる所にして、屋樓街頭の様、行人の賑はしき光景巧に描き出され、當時京洛の地の風俗、之れによつて推想し得べし。



こころなり、懃懃亦難小し丁夙をなると至る。

其の被割手野行に、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

THE UNIVERSITY OF CHICAGO











長恨繪卷

紙本 竪一尺一寸三分 横全長四丈二尺四寸

Chokonka (Chinese Emperor Genso) Painted on a Paper Scroll. Artist, Unknown.  
(17th Century)

小篠彦平君藏

長恨歌の繪、一に玄宗皇帝繪と稱し、また類似のものに安祿山合戦圖あり、かゝる支那の事蹟を畫題とせしこと頗る古くして、既に源氏物語桐壺の卷に、此ごろ明くれ御覽する長恨歌の御繪、亭子院のかゝせ給ひてありて、拾遺集、夫木集、續後拾遺集等に、長恨歌の屏風に、伊勢の和歌を題せしこと見え、後拾遺集には、道命法師の長恨歌の繪に於ける愁然たる玄宗皇帝を詠ぜし歌、載せられたれば、唐の文物我が國に移植せられてより、かゝる畫題の世の好尚に適合する所ありしを知るべし。玉葉また治承三年九月四日の條に、玄宗皇帝繪六卷を一見せし由を記し、同書建久二年十一月五日の條には、長恨歌繪に信西入道自筆の添書ありし旨を述べたり、また世に安祿山合戦繪と稱するものある由記録に見ゆ。然れどもこれ等の繪は名のみ聞えて、今の世には傳らず。唯狩野山樂の筆に成れる長恨歌繪二卷、絹本極彩色にて結構比類なきもの、尾張一商賈の家にありし由、考古畫譜に見えたるは、近きことなれば、現存するにやあらん。かくの如く舉げ來れば、長恨歌繪と稱するもの種類少しとせず、本集收むるもの、果して如何なる系統に屬するものぞ。

この繪卷は九段の繪ありて、詞書も頗る長し、總長四丈二尺四寸に及ぶ大作なり。然も繪と詞書との筆者につきては、更に傳ふる所あらず。今畫風の上より判斷すれば、狩野派の筆に成りしこと明にして、然かも狩野派と大和繪との融合成りし時代のものなることも疑なく、探幽以後の狩野家の作にあらずることも推想するに難からざるなり。かく考察する時は、考古畫譜に載せたる山樂筆の長恨歌繪二卷といへるは、最もこの繪に關係深きものにあらざるか、委細に構圖、賦彩、用筆等の手法を見來れば、山樂の特徴よく表出せられたる所なきにあらざる。然れどもこれを以て直に山樂の眞筆なりとは斷すべからず。この繪が所謂模寫の性質にあらざれば、恐らく山樂なごの圖によりて、狩野家のさる能手の畫けるものならん。

要するに本圖は狩野家が未だ墮落せざる時代の作にして、もし考古畫譜に載せたる山樂筆の長恨歌がこれと何等かの關係あらば、また頗る興あることにして、研究の資料として貴重なるものといはざるべからず。















傳山田右衛門作筆 西洋騎士圖

紙本 竪一尺九寸四分 横二尺

Painting of a Foreign Cavalry. Attributed to Yemosaku Yamada.  
(17th Century.)

福島啓三郎君藏

明治以前の洋畫には二つの系統あり、天文年間耶蘇教の傳來により西洋の文物輸入せらるゝに至りて、初めて洋畫の法を傳へ、茲に新氣運を開きしが、寛永年間に於ける島原の亂は、耶蘇教を根絶せしむるの因をなし、洋畫の系統も亦其の終焉を告げざるべからざるに至れり。次に享保年間に至りて、將軍吉宗、洋書の禁を弛むるや、蘭學起り洋畫再び榮えて、司馬江漢亞歐堂田善等名聲噴々たりしが、其の系統は實に徳川初期のものと同じからず、本集收むるもの即ち第一期のものに屬し、本邦初期の洋畫として頗る貴重なる資料とす。

惟ふに織田豊臣二氏の時代より徳川初期の間は洋畫の傳來したるもの尠少にあらず、邦人亦この新異の描法を喜び、これに倣ひて新興の洋畫亦世に行はれたりしに、耶蘇教嚴禁の鐵槌下るに及びて、人々後難を恐れ、て燒棄するに至りしかば、現今遺存するもの甚だ少し。西洋傳來のものにて有名なるは、伊達伯爵家藏支倉常長肖像、東京帝室博物館藏聖僧圖等にして、邦人の手に成れるものは、舊會津藩主松平子爵家に珍藏せらるゝ泰西王族騎馬圖、屏風、南部伯爵家の西洋風俗圖六曲屏風一雙、盛岡市圓光寺の西洋婦人圖、懸額、神田男爵所藏の西洋武人圖、西村澹氏藏西洋貴族圖屏風等にして、其の他世に傳はれるものは多からず。然るに吾人は更に本圖をこれ等諸名品の内に加ふるを得たるを喜ぶ。

本圖は古河藩主土井侯の一族たりし土井氏の舊藏にして、もご四圖ありしもの、今二圖を存す。共に騎士の劔を揮へる圖にして、他の二圖は鮮血を流して戦へる悽慘を極めたるものなりしといふ。

筆者に就きては明かならず、山田右衛門作の筆にあらずやとの説をなすものもあるも、未だ遽に首肯すべからず、其の筆致と顔料用紙等より見て、日本人の作なることは疑なく、日本の顔料を用ひて、洋畫の趣致を表現せんとして、苦心經營の跡歴然たるものあり。頗る松平子爵家藏泰西王族騎馬圖屏風に似たる所あり、製作年代も亦この期を去ること遠からざるものにして、美術史上最も貴重なるものといふべし。



も亦この陳述を以て之を蓋せざるものなり、丁、美術史に最も貴重なるものなりといふべし。

本書の源を丁に明かせるを、山田洋輔門下の幸であるを、その鑑定するものあるも、木村敏二首肯をいへば、  
を耻へる圖に丁の二圖は鑑定を流し丁輝へる對照を辨めたるものなりといふ。

本書の源を丁に明かせるを、山田洋輔門下の幸であるを、その鑑定するものあるも、木村敏二首肯をいへば、  
を耻へる圖に丁の二圖は鑑定を流し丁輝へる對照を辨めたるものなりといふ。

本書の源を丁に明かせるを、山田洋輔門下の幸であるを、その鑑定するものあるも、木村敏二首肯をいへば、  
を耻へる圖に丁の二圖は鑑定を流し丁輝へる對照を辨めたるものなりといふ。

本書の源を丁に明かせるを、山田洋輔門下の幸であるを、その鑑定するものあるも、木村敏二首肯をいへば、  
を耻へる圖に丁の二圖は鑑定を流し丁輝へる對照を辨めたるものなりといふ。

本書の源を丁に明かせるを、山田洋輔門下の幸であるを、その鑑定するものあるも、木村敏二首肯をいへば、  
を耻へる圖に丁の二圖は鑑定を流し丁輝へる對照を辨めたるものなりといふ。

(JAP. Camille)











宮崎友禪齋筆

壽老騎鹿圖

絹本 竪二尺三寸五分 横六寸五分

Painting of Jurojin. By Yuzensai Miyasaki.  
(18th Century)

清野長太郎君藏

友禪齋は宮崎氏、また單に友禪ともいふ、京都の人なり。光琳の畫風を學び、設色に妙を得、浮世繪にも巧にして、自  
ら一格を創始せり。天和より寶永間の人にして、落款には鳳城東友禪齋の號を用ひたり、蓋し京都鴨川の東、仁王  
門通に住みたればなるべし。世に傳ふる所によれば、京染と稱する美麗なる模様を染出すことを工夫せしは友  
禪なりといふ故に友禪染の名あり。女用鑑に曰はく、爰に友禪といふ浮世繪法師あり、一流を扇に書出せしか  
ば、貴賤の男女喜悅の肩うるはしく、丹花の唇をほころばせり。是によりて衣服のひな形を作りて、呉服飾に與へ  
し。又同書に花の丸盡しの模様を友禪染といふとあり、以て友禪染の名稱、頗る古きを知るべし。惟ふに友禪齋  
は光琳風を善くしたれば、設色美麗にして、意匠も巧妙なりしなるべく、衣服の上繪なごに妙を得、一度名聲を博  
してより、他のこれに摸するもの多く、遂に友禪模様の名をして、天下に普ねからしむるに至りしなるべし。

友禪齋は生死の年月詳かならず、作品の世に傳ふるものも多からず、近世逸人畫史には、友禪齋筆鼠の娶入の圖  
ありといへり、一大松樹を寫し、枝葉の間より、倉庫の屋根又は牕戸なき隠見し、鼠の行列其牕戸を出入し、鼠の形  
狀精細分明にして、實に絶妙なり。又元祿五年板、和歌物あらひ、寶永三年板、繪本祇園梶の葉は皆友禪齋の畫く  
所、板畫にも筆を染めしを知るべし。

本圖は彼がよく光琳の畫風を得たるを見るに、共に、卷物、笠、杖等を肩にして鹿に乘れる態度、頗る飄逸の風に富  
むを認むべし。設色所謂友禪染の如き濃麗なるものにあらざるも、却つてこれ彼が眞面目を發揮したるものな  
らん。



[illegible][illegible]

(18th Century)

Painting of Hirojin. By Yuzensai Miyazaki.

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十











土佐光成筆

僧正遍照圖

絹本 竪二尺六分 横九寸

Painting of Sojohenjo, a Priest. By Mitsunari Tosa.  
(1646—1710)

子爵 末松謙澄君藏

文藝は須く自由討究に依らざるべからず、有力者の保護亦極めて必要なり。雖、徳川時代に於けるが如く、文藝を世襲するに至つては、墮落衰頹は遂に免るべからず。試に林家を見よ、羅山、鷲峰、鳳岡以後、大學頭の職を辱めざるものありや、狩野家に於て尙ほ守信、尙信、安信、常信の以後は如何、土佐家に於て光起の以後、特に稱揚するに足るべきものなきは怪むべきにあらず。然れども猶光起の子、光成、未だ遽に捨つべからず。

光成は畫法を父に受く、光起は畫界の人傑なり、よく大和繪の古體を學んで、これに漢畫の法を加味して、時勢の變化に應じ、社會の趣味に適應せしめたり。これ光起の繪が、新時代に生命ありし所以にして、よく其の家法を失はざりし光成も亦藝術界の一角に地歩を占むるに至りしなり。畫技もさより父に及ばざりしと雖、猶後の土佐住吉の如く、固陋なる典型に束縛せらるゝことなく、謹嚴なる筆致を以て、頗る自由に揮灑せるは喜ぶべきにあらずや、僧正遍照の圖の如き、よく彼が眞面目の態度を以てせるものなるを見るべく、秋の野に立てる人馬の情趣、殊に豊かに表はし得たるは、彼亦凡骨にあらざるを證すべし。京都に住し、繪所預となり、左近衛將監に叙せられたるも、未だ其の職を辱めしものさはいふべからざるなり。









虎丘近海濱草堂









呂文英筆 賣貨郎圖

絹本 竪五尺二寸六分 横三尺

A Miscellaneous Goods-Seller. By Robune.  
(15th Century)

東京美術學校藏

明代は即ち主權漢人に移りたる時代なるを以て漢族の文化發展顯著なるものありて、畫道また一層の興隆を見たり、されば元朝には畫院の設なかりしも、茲に再び趙宋の遺緒を紹ぎて、其の復興を見るに至れり、其の規模甚だ大なりとはいふべからざるも、歴代の帝王多く畫を好み大に斯道を獎勵せしかば、名匠巨擘彬々として畫院より輩出し其の盛、南宋のそれと競ふに至れり、呂文英の如きは即ち其の畫院に屬せる一人なりとす。

呂文英は括蒼の人、孝宗の時、指揮同知を拜し仁智殿に直し、畫名嘖々たり、孝宗畫を善くし、怡も宋の徽宗高宗の畫に堪能にして獎勵刊れる如く、弘治年間の畫院も亦よく保護獎勵せられて、隆々俊秀蟬集の狀を呈せり、吳偉、呂紀、王諤、林時營、張乾、鐘欽禮、沈政の如き皆有名にして、何れも仁智殿に直し、呂文英は呂紀と並び稱せられ、小呂と呼ばれたり、特に人物を善くす、本集收むる所の賣貨郎の如き細巧緊密賦彩麗美、よく明代畫院の特長を發揮せるものといふべく、宋元諸家の如き雄渾簡勁なる風韻に缺くる所あるも、畫風概して穩健にして、其の技巧は圓成の境に入り、設色精良、また明代畫道の一進歩と稱すべし。















岸 卓堂筆 唐美人圖

絹本 竪三尺二寸五分 横一尺一寸八分

Painting of Chinese Beauties. By Takudō Kishi.  
(19th Century).

子爵末松謙澄君藏

應舉の寫生を以て一派を開くや、更にまた寫生より出でゝ一派を立て、應舉吳春等と角逐して、相下らざりしものを岸駒とす。卓堂はよく其の法を受けたるものなり。元來岸駒は霸氣に滿ち、筆墨を弄して、勁健奔放に流れ、風格頗る卑俗を免れざるは惜むべし。卓堂の筆、岸駒に倣ふと雖、未だ彼の晩年の筆の如く、甚だしき病癖に陥らざるものあり。本圖の如きは、卓堂會心の作なるべく、結構緊密、賦彩優麗にして、明畫の趣致を有し、二嬌の楚々たる姿態と、樹石器什の描法よく調和を得、圖法整然として、高雅艷美の趣を表はせり。蓋し明畫の粉本によりしものならん。然も梧桐巖石の描法より、衣紋の線に至るまで、よく自家の特技を發揮し、筆墨の妙を示せり。岸駒は虎を寫すに名を得たりと雖、好んで人物畫を作りければ、卓堂も亦この種の畫題に興味を感受したるなるべし。即ち岸派の門流に於ける佳作の代表として、繪畫史上に特筆せらるべきものなり。















林成幹筆 春夜宴桃李園

絹本 縦一尺四寸八分 横二尺三寸

Painting of a Feast under the Blossoms in a Spring Night. By Linseikan.  
(17th Century).

安藝秀治君藏

山水道釋等は、由來士大夫文人の餘技として作られたるもの多く、殊に山水畫に至りては、筆墨の靈を以て煙雲泉石の幽を拓き、造物之奇を爭ひ、悠然として天趣を發揮したりしが、風俗人物畫にありては、もこ描寫の眞を現はさざるべからざるにより、形似の精確を期せざるべからず、故に風俗畫は細巧精緻の筆を弄し、人物の巧み相俟つて背景亦精ならざるべからず。風俗畫に巧緻を極めたるもの多きはこれが爲めなり。

本圖の如きは頗る布置經營に苦心の跡を認むべく、桃李今を盛に咲き亂れ、綠樹この間にありて、色彩の諸調を保ち、堂宇は巍然とし、前庭には多數の雅客花に酔ひ酒を汲み、悠々自適の境にあるが如し。よく個個の動作を表現し、兼ねて相互の關係亦よく整ひ、殆んど絹の素地を餘さざるまでに筆を下し、濃麗巧緻を盡して、猶且つ吾人に煩冗の念を起さしめず、畫面よく緊張して冗漫の憾なきは、これ本圖の頗る優秀なる構圖をなせるによるなり。

元來風俗人物畫は明の仇英によりて大成せられしが、其の後特に傑出せるものなく、明清の間に於て、吾人の賞鑒に値すべき作を遺せるもの少し、されば本圖の如きは支那近代に於ける風俗畫中の注目に値すべき作といふべし。

本圖は扁額にして、こゝに掲出したるものより稍長く、款識は次の如し。戊午季冬作於花含月吐茶半香初之館寅堂仁兄大人法家雅正、小山甫弟、林成幹。



本圖は、醗酵により、この二部出たものより餅見、糠麴お水の膜。此半季まで漬置けり、和茶半香時  
をへち、餅なりぬべし。

人の貴鑒ニ動すヲモ非キ敷サるもの也、うち其の本圖の版を以支雅並升ニ付ける風俗畫中の新目ニ動  
 元來風俗人啁噓お即の所英にもり丁大奴サは其の遊藝ニ樂出サるものなり、即漸の間ニ然り、吾  
 等も附圖を志するものなるなり。

を盡し了、餘且て吾人の歎の念を歩ちしゆを、畫面より深敷くす。其處の如きものは本圖の顔に對するの憧憬を表現し、兼は丁牀上の關係をもと變ひ、故に左側の素紙を綴るやあるものなり。筆さす可く、點麗に燃焼區を射る、堂宇の懸架より、顔面に對する遠くの觀者并に額を斷つ如く、想や實意の如く、いふも眼より、一層本圖の眼をおどる布置、聯繫の苦心に幅を強ひへり、獨り今を過ぐると、應に應に、新嘉坡の國境より、南洋の海を渡る。

謝靈運の眞を眞おちけるへはなちるこも、紙烟の辭韻を陳せけるへはなを姑に風俗蒿お勝西辭韻の筆  
う對云界口に謝靈運を對照し、直を對照し、然るに丁卯を對照し、然るに風俗蒿を對照し、然るに筆  
山水畫對照、由來士大夫文人の繪対し、丁卯はひけるもの多し、然るに山水畫に至り、丁卯筆墨の靈を以

(17th Century).

Painting of a Teat under the Blossoms in a Spring Night. By Tinssekku.

縣水 雞一只 四十八分 雞二只 三七

林風神筆莊宴酬李園











宮川長春筆 美人圖

絹本 竪二尺七寸 横一尺二寸

Painting of a Courtesan with the Servants. By Choshun Miyagawa.  
(1691—1752)

酒井庄吉君藏

浮世繪といへば直に版畫を想起すべく、恰も錦繪の異名の如く感ぜらるゝ。雖、これ徳川中期以後のことにして、其の以前にありては、浮世繪も亦肉筆隆盛の時代なりき。其の間にありて、嶄然として頭角を現はし、版畫に筆を執らずして専ら肉筆畫のみに全力を傾倒したるものを宮川長春とす。實に長春は版下繪を畫かざりしを以て、當時にありては一見識として賞揚せられたり。彼がかくの如き態度をこゝこそを得たる所以のもの、抑も其の源因なかるべからず、即ち彼が畫技修養の確實なりしが爲めにして、狩野土佐の諸法に通じ、以て風俗畫を作り、筆力優逸にしてまた賦彩に巧妙を致しければ、他の浮世繪師とは大に異なる所あり、以て肉筆畫に一新生面を拓くを得たりしなり。彼が習技かくの如くなれば、其の畫く所古典的に傾きたるもの少なからざれども、元來時様の風俗を寫すを以て主眼とし、日本繪師の肩書を用ふるこそ菱川師宣の如く、肉筆に於ては浮世繪師中傑出したるものにして、師宣に次ぐものといふべく、其の遺作少なからず、本圖の如きは長春の筆として、敢て傑作と稱すべき程のものにあらざるも、彼が技倆の凡ならざるを見るべく、作風の一斑を窺ふに足るべし。長春は寶曆二年十一月を以て歿せり。時に年七十一。



(1601-1625)  
Painting of a Courtesan with the Servants. By Choshun Miyagawa











住吉廣通筆 扇面源氏繪

紙本 竪四寸 横九寸八分

Painting of a Scene from the Genji-Monogatari. By Hiromichi Sumiyoshi.  
(1599—1670)

侯爵 徳川頼倫君藏

本邦繪畫の本流たりし大和繪は、足利初期より宋元畫風の勃興によりて、其の聲價を失ひ、畫風萎微してまた昔日の倂をも偲ぶべからざるに至れり。僅に光信ありて漢畫に對立したりと雖、爾後益々落日の寂寥を感じたりき。然るに徳川の治世に及び文藝の復興に伴ひて、大和繪の流を汲める土佐家は朝廷の保護によりて繪所預となり、土佐の繪所は再興せられたり。

茲に述べんとする廣通は、即ち土佐の支流にして、其の宗家が京都に住したるにより、廣通は即ち江戸に下りて將軍家に仕へたるなり。廣通は光吉の二男にして、初名を光陳といひ、後忠俊と改む。光起の叔父なり。或はいふ、實は光吉の門弟なりしを、將軍秀忠の寵遇により關東に召さるゝに就き、その猶子としたるなりと。内記に稱し法眼に叙せられ、如慶といふ。蓋し後西院天皇の内勅を奉して、住吉慶恩の家を再興したるなり。慶恩に就きては異説あり、慶恩と稱するもの世に存せず、慶忍の誤ならん。或は然からん。されど如慶が慶恩の家を興したりといふは即ち鎌倉初期の大和繪畫家の後を嗣ぎたるものにして、大和繪復興の目的なりしや必せり。未だよく鎌倉の畫風にかへすこと能はざりしと雖、土佐畫に新氣運を與へたるは特筆すべきなり。

本圖は源氏物語の一節を畫きたるものにして、土佐派の好んで題材とする所なり。畫圖精麗巧緻を極めて、賦彩に卓拔の技を發揮し、硬澁沈滞の痕なし。畫法は土佐家の遺格を守り、敢て嶄新なる手法を工夫せざりしと雖、實に住吉家中興の名手として噴々の聲譽を得たり。本圖の如きは、以て彼が技倆を窺ふに足るものなり。寛文十年六日二日歿す、年七十二。子廣澄嗣ぐ、具慶と稱し、世に顯はる。















美人奏樂圖（繪巻物の一部）

絹本 縦八寸

Painting of the Play. (15th Century.)

下條正雄君藏

抑宋元以上の人物畫は、道釋畫を以て其の主なるものせしが、元代以降宗教衰ふるに共に、漸く其の風潮を一變し、明代に至りては、人物畫主要なる位置を占むるに至りぬ。而して流麗纖巧なる風俗畫は、實に明代の特色なりといふべし。これ一代の文運擬古形式に流れ、社會の風尚は淫靡に傾き、小説戲曲の軟文學異彩を放つに至りしかば、従つて纖巧細麗なる美人畫を生ずるに至りしなり。

蓋し本圖の如きもこの傾向によりて作られたるものなるべく、頗る精緻を盡せるものなれども、猶描法稍剛健なる所ありて、元畫に近き趣を存するものあり。布置經營に苦心の跡を認むべく、背景との調和も整ひて美人相互間の關係頗る面白く、婀娜たる姿態をよく寫し得たりといふべし。筆者詳かならざるも、明代大家の筆に成りしものならん。















狩野秀頼筆 芙蓉圖

紙本 竪二尺一寸 横九寸五分

Hibiscus Mutabilis and Dragon-Fly. By Hideyori Kano.  
(16th Century.)

三宅長策君藏

秀頼は狩野元信の二男にして治部少輔たり、古畫備考の傳ふる所、季頼とす。雖印文何れも秀頼なるを以て見れば、蓋し古畫備考の著者誤れるなるべし。昌運筆記には乗信とありといふ。其の畫世に傳ふる所極めて少く、また珍貴なるものに屬す。

本圖は一小品に過ぎず。雖輕々に看過する能はざるものあり。そは賦彩濃麗にして、其の手法に頗る獨創的才能を現はしたるを見るべく、且つ元信の創めたる和漢渾融の一體、よく其の子に傳はり、永徳山樂などの豪宕富麗なる一體を大成せる徑路の一端をも窺ふに足るものあればなり。今其手法を見るに、芙蓉の色彩の沈厚なるは、一度朱を塗りて其の上に雲母を用ひ、生色を避けたるによるものにして、賦彩の効果頗る著しきものあり、清新にして巧妙なる法といふべく、用筆は謹嚴にして然も典型に束縛せられず、生硬の弊にも陥らずして、よく花卉の實寫を成し得たるものといふべし。かの大徳寺塔頭大仙院の襖に畫かれたる元信筆の花鳥畫の如き、即ちこの先をなすものにして、吾人は特に同圖中の牡丹を想起せざらん。欲するも得べからざるなり、能く父子師資相承くるものあるを見る。この清新なる當時の新派は次期の桃山時代に於て、最も活躍したりしが、これ實に元信の創意を承けて更に發展したるものにして、秀頼の如きまた與つて大に力あるものといふべし。















幸野 煤嶺筆 寒牡丹圖

絹本 竪八寸六分 横一尺一寸五分

Snowcapped Tree-Peony. By Bailei Kōno.  
(1844-1895)

笹川 臨風 君藏

明治初年の暗澹たりし藝術界は、十四五年の交より漸く曙光を認めて、文藝復興の運に向ひぬ。京都は延暦、奠都以來文藝の中心なりき、維新の後皇居東京に遷され諸般の事物萎靡せるもの少なからざりし。雖猶依然として藝界の一大焦點たるを失はざりき。明治十三年七月、京都府立畫學校の開設を見たりしは、最も注目に値するものにあらずや。而して當時この校の教授の一椅子に倚りしものに幸野煤嶺あり、煤嶺は岸竹堂、巨勢小石、田能村直入等と共に、京都畫壇振興に熱血を濺ぎたるの人、然も勳勞最も多く、現時の盛を致せるは實に煤嶺に負ふ所大なりしなり。

煤嶺名は直豐字は思順、通稱は角三郎、鶯夢とも號し、別に長安堂、青龍館、六柳北圃、金仙茶寮、香雲深處、無聲詩屋、三守蝸室、如意山樵、春風樓、鶴鹿園、在五菴、晴蝸禪房、雪廼家等の諸號あり、弘化元年三月三日京都に生る、九歳にして中島來章の門に入り、圓山派の畫法を修むること二十年、更に師の許諾を得て、四條派の鹽川文麟に就きて山水の法を學ぶ。更にまた前田暢堂、中西耕石等の文人畫家に交り、技益々進み、畫運の復興と共に、名聲噴々たりき。明治二十六年帝室技藝員に擧けられ、二十八年歿す、年五十二、著す所、百鳥畫譜、花鳥畫譜、煤嶺畫譜、煤嶺菊百種、千草の花、亥中の月、工業圖式、毛筆畫帖等あり。然も煤嶺の爲めに特筆すべきは、京都畫壇の振興にあり。子弟の薰陶にあり、現時の京都畫壇の大家多く煤嶺の門に出でたり、竹内栖鳳、菊池芳文等、實に其の錚々たるものなり。

本圖は煤嶺の一小品に過ぎず、雖老熟の筆致、よく彼が眞面目を語るものにあらずや。



















